325
435

始

勲二位
一等伯爵 土方久元閣下題辭 文學博士芳賀矢一先生序

勲三位
勲一等功級陸軍大將一戶兵衛閣下題辭 學習院教授齋藤惇先生序

勲五位
勲四等掌典宮地嚴夫先生題詠

小笠原省三先生著

日本神代物語

東京 御大典記念協會藏版

昭
5. 7. 31
内交

邦家之隆祚

王化之淵藪

八十四叟正位久元忠

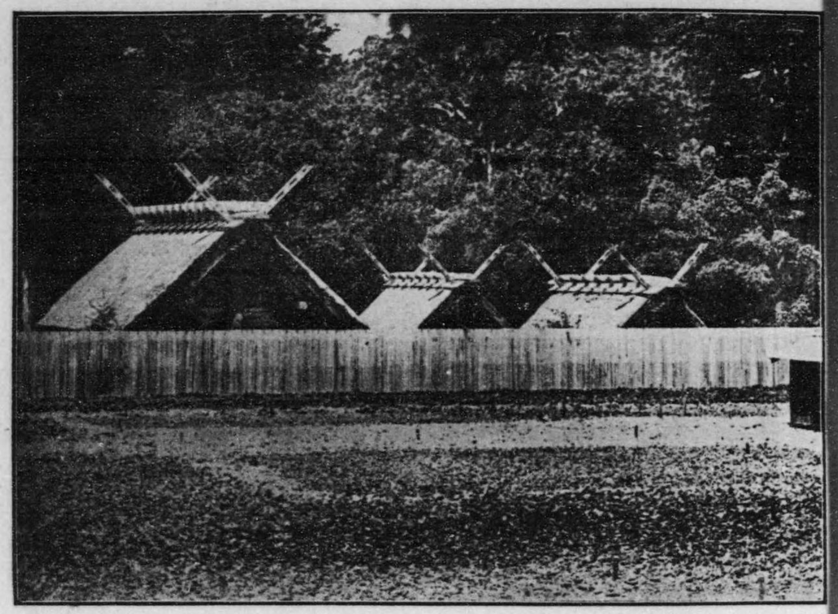
寶祚無窮

兵衛筆書

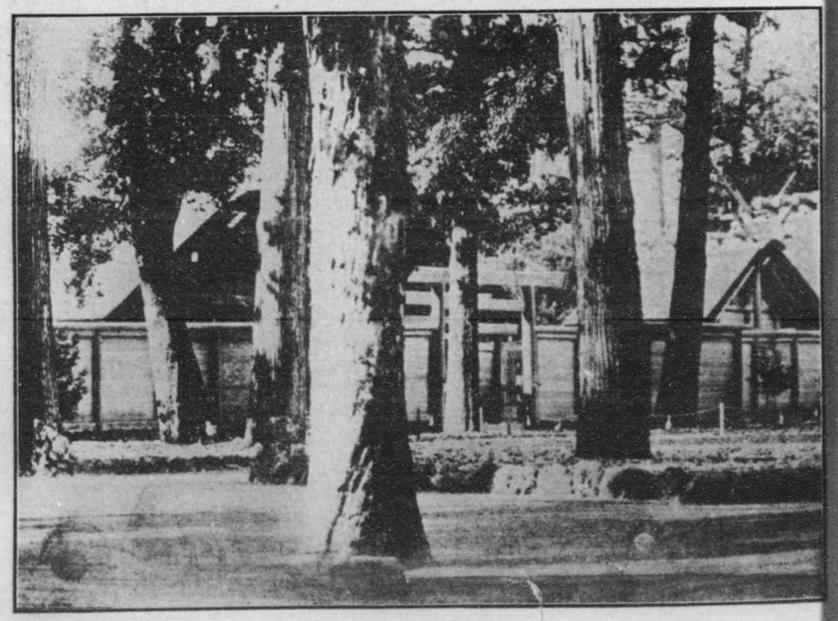
小笠原省三氏のもとを
られたる日本神代物語を
よみて

巖夫

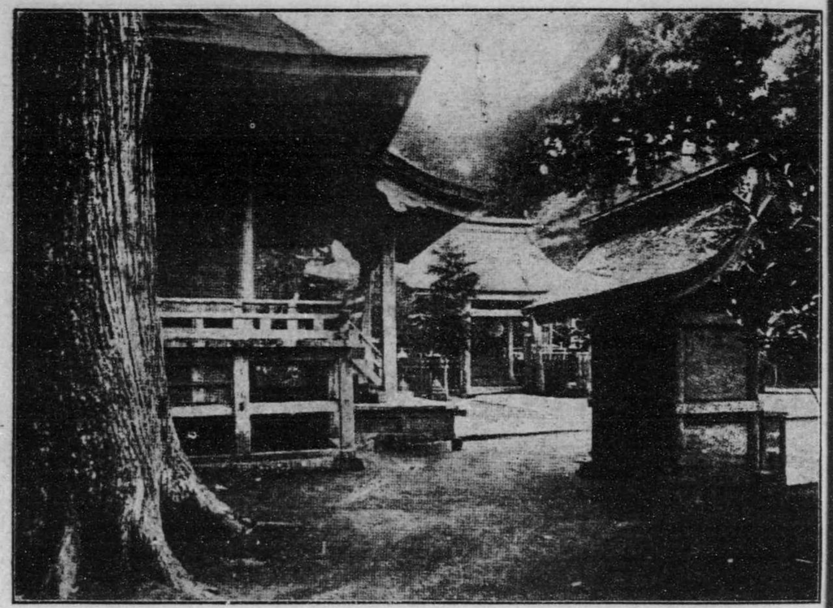
靈ちはふ神代の
道をたどるき
ちをちらちらむ
ゆはらめる空



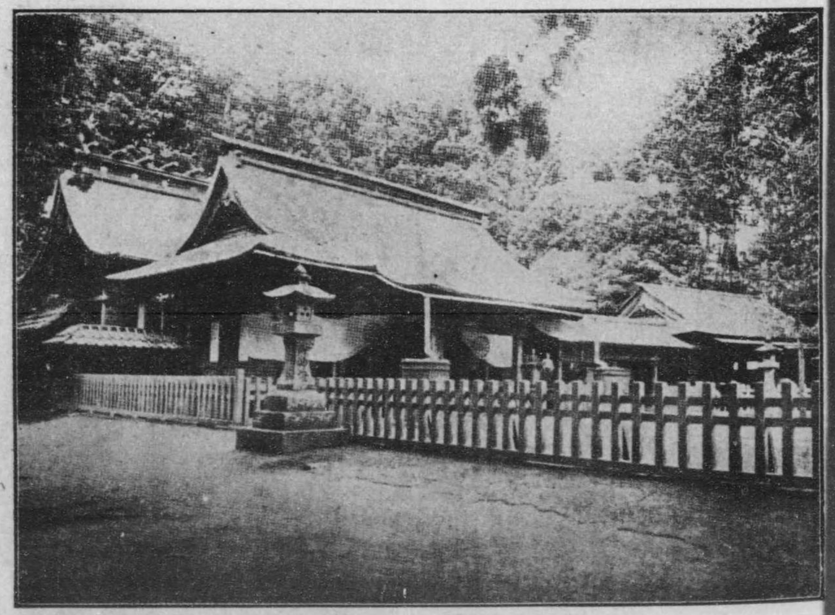
伊勢內宮



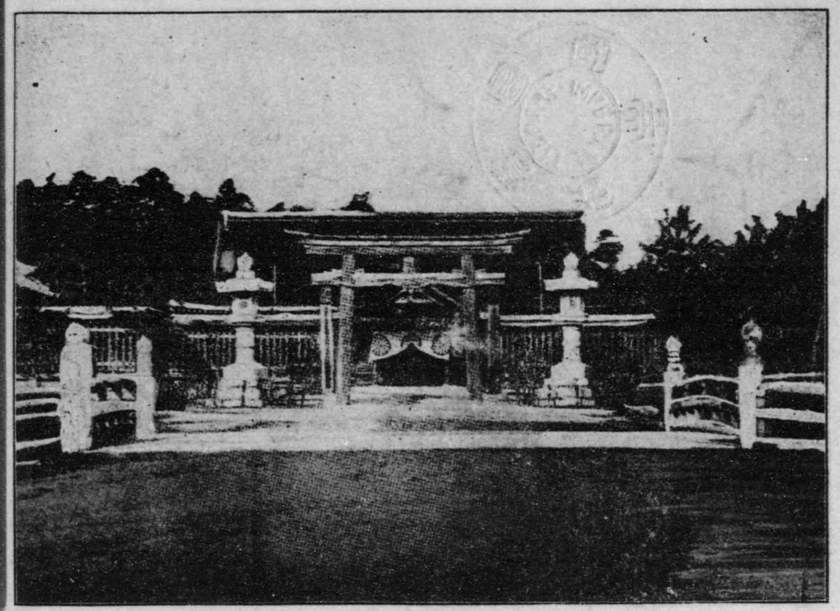
伊勢外宮



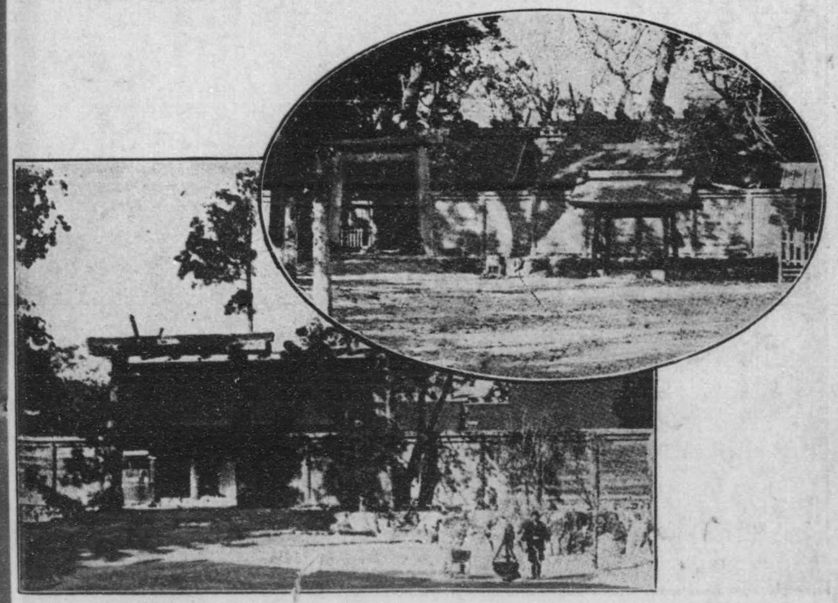
鹿島神社



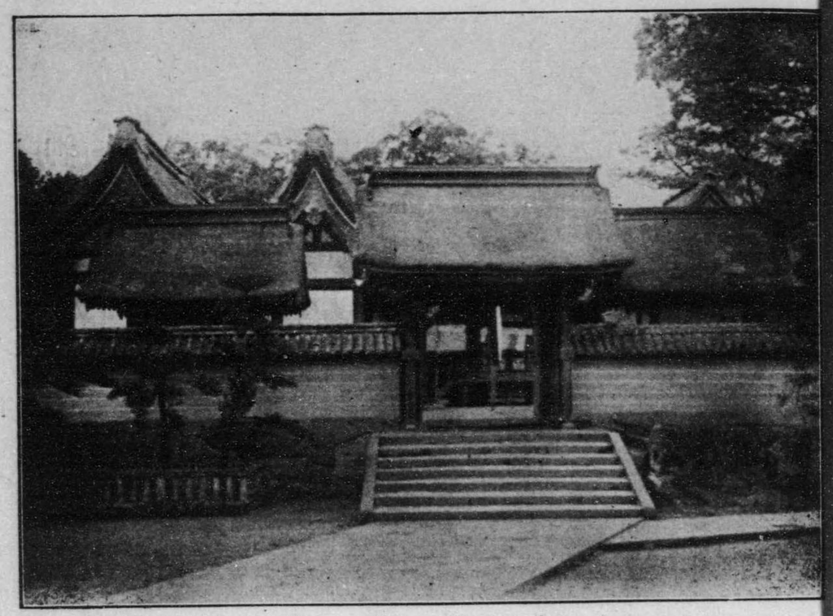
鹿取神社



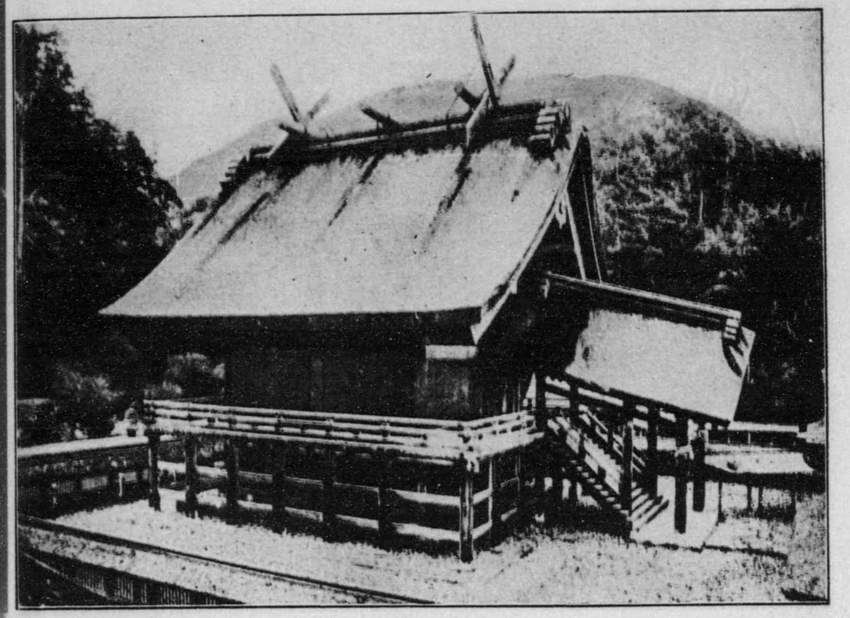
橿原神社



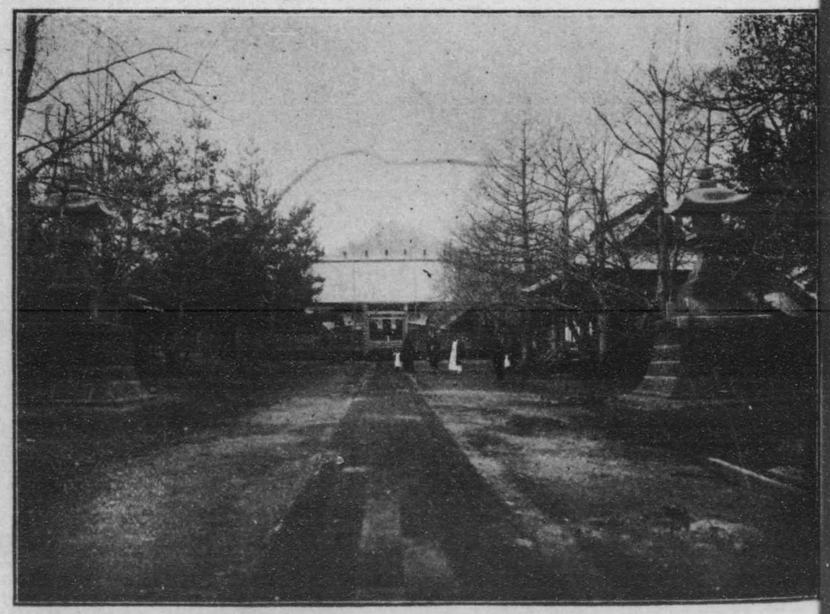
熱田神社



宇佐神社



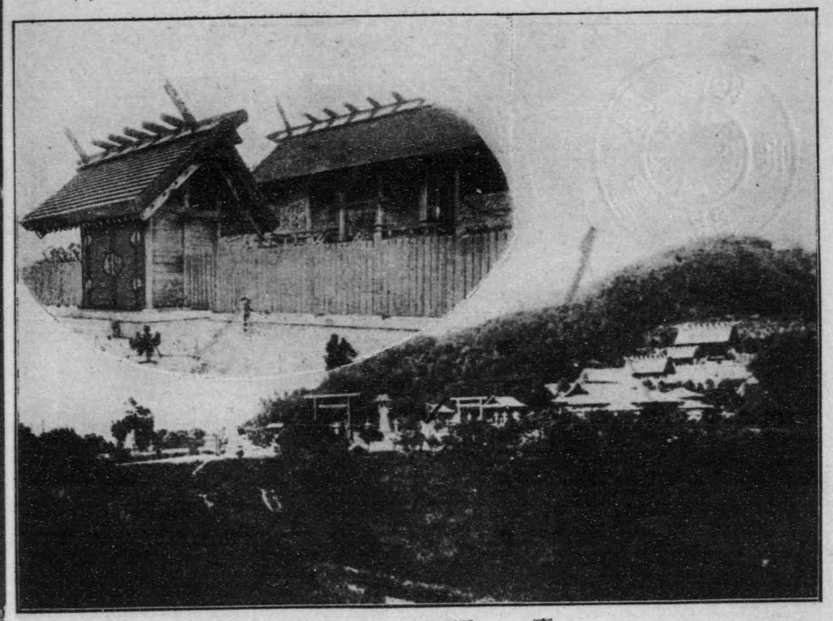
出雲大社



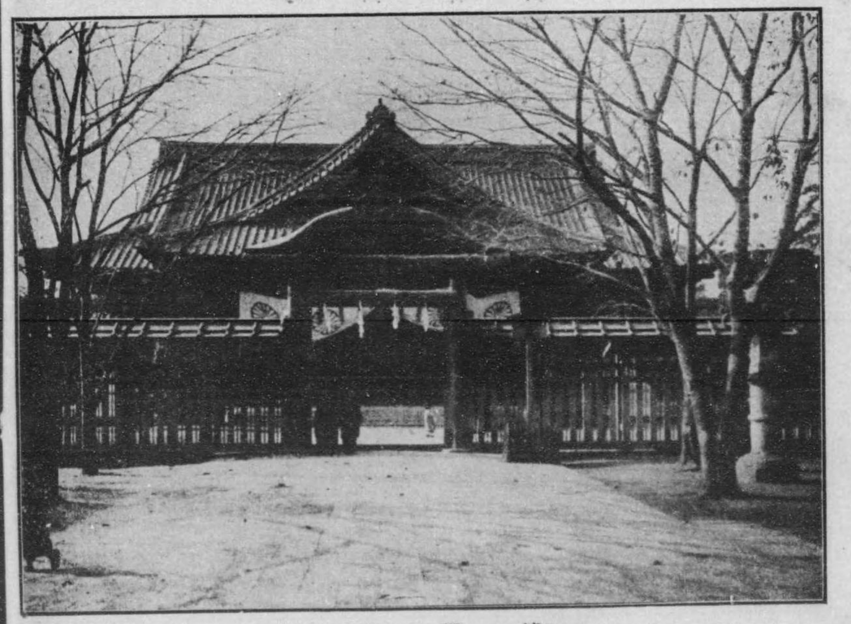
札幌神社

琴平神社

~~227~~-435
325



臺灣神社



靖國神社

序

小笠原氏が神代物語を著して一言をと請はれた。自分はかういふ種類の著書のなるべく多く出ることを望むものである。獨逸あたりでは、少年讀本、青年讀本としていくらもあるのに、日本ではこれまであまり無かつた。小學校の歴史も神代の事柄は教へずに、大抵は神武天皇から委しく書いてある。これは元來不都合である。日本書紀からして神代と人代とを別け、大日本史なども、天皇紀として神武天皇から置いてある。何事も支那の流儀を學んだ所から、知らず知らずかうなつた所へ、西洋流の科學主義にかぶれて、神代の事柄

は今の理屈から分らぬから、小供には不適當だなどといふ偏見が勝つて居るのである。神代の物語は神代の物語として、何等の修飾も加へずに古人の傳へ來つたまゝに、我等國民の知らねばならず、傳へねばならぬものである。こゝに愛國心の基礎も置かれるのである。自分は此見地からかう云ふ書物の多く出るのを喜び、さうして小笠原氏の努力をも謝するものである。

大正五年五月二十九日

文學博士　芳賀矢一

神代物語序

古事記は我が國最古の史籍にして、我が國家の由來する所、國體の尊嚴なるところ、君臣の情義の深厚にして風俗の淳美なるところ、これによつて以つて見るべく、列聖の寶訓亦以つて窺ひ奉るべきなり。是れ即ち邦家之經偉王化之鴻基たる所以にして、苟も國民たるものの、日夕に誦讀して須臾も忘るべからざる寶典なり。然るに其の所謂神代の卷の如きは、其の辭極めて古雅に、其の義甚だ深遠にして俗耳には容易に入りがたく、專門家といへども其の難解に苦むものなり。是れを以つて世に之れを讀むもの甚だ少きは、遺憾のきはみ

なり。小笠原省三氏茲に見るところあり、現代の口語を以つて神代の卷を譯し、名づけて神代物語といふ。辭極めて平易にして、文甚だ流暢なれば、童蒙といへども一讀して、其の大義に通ずることを得べし。されば本書の國民教育上に資するところ實に尠少にあらざるを知る。小笠原氏は靑森縣の人にして、明治の末年に皇典講究所なる神職養成部を卒業し、爾來數年專ら神典の研究に努め、今此の著あるは決して偶然にあらざるなり。然れども氏や年尙齒少くして、進取の氣甚だ鋭なり。願くは小成に安んずることなく、將來益研鑽の功を積みて他日の大成を期せむことを望む。予

在學中より君の學才を知り、夙に期待するところあり、故に其の序を徵さるゝに及び敢へて一言すること此のごとし。

大正五年五月二十八日

學習院教授　齋藤惇　しるす

自序

近來わが國思想界の混亂は其の極に達し殆と歸一するところなき有様なり。中にも年少のものは、極端なる崇外思想に囚はれ、往々憂うべき言行を敢へてするに至れり。これ實にわが國體の尊嚴なるを知らざるに基因するものにして、現時の教育の一大缺陷と云はざるべからず。然らばわが國體の尊嚴なる所以は、何に依つて知るを得べきか。日本神代史の研究は茲に於いて始めて必要なり。

抑もわが國神聖の行ひ給ひしことは、これを中外に施して惇らず、これを古今に通じてあやまらざること、炳として日星の如く、教育の淵源またこゝに存し、神國の所以これに發顯す。而してわが建國の精神はこれによつて知られ、日本民族の大理想は實にこの神聖の遺志を顯照するにあることを知らざるべからず。

然るにこれら神聖の事蹟を知るには、古事記日本記等の所謂神代の卷

に依らざるべからざるも、文辞古雅に、意深長にして年少のものには容易に窺ひ知るを得ざるものなり。予これを憾みとし、わが神代史をして一般年少のものに周知せしめ、以つて國體觀念を養成せしめんと思ひ、不敏不才をも顧みず古史を考證して此の一卷を完し、今回上梓することを得たり。

粗辞亂文、或は精確を缺くことあらば、希くは賢明なる讀者諸君の叱責を得て、他日訂正を試みんことを。終りに、土方伯爵閣下、一戸陸軍大將閣下の題字、恩師宮地先生の題詠、芳賀先生、齋藤先生の序文等を以つて此の小著の卷頭を飾ることを得たるは、著者のまことに光榮として感謝措く能はざる處なり。茲に謹んで謝意を表す。

大正五年六月二日の黎明　　江戸川のほとりにて

著　者　謹　識

凡例

一、本書は主として古事記を基とし、日本書記、古語拾遺、舊事記、延喜式祝詞式新撰姓氏錄等を考證して、一般青少年の讀み物として書いたものである。

一、されば其の用語の如きも、なるべく平易に、そして不敬に亘らざる範圍に於いて、或は省略し、或は增補したところが多い。小學校あたりの敎師は、これによつて神代のことを兒童に敎へられたく、また、中學校の生徒はこれによつて、學校にて等閑に附して敎へられざる、日本神代の有樣を窺ひ知つてもらひたい。

また、家庭に於いて俗惡なお伽ばなしなどを讀むよりも、一般の少年は此の書によつて、聊かでも國體觀念を養つてもらひたい。

一、第一より十九までに於いて、天地のはじめから、神々の苦心慘憺して

此の國を作られたことから、いろ〳〵な樹種や、醫藥の法などを定めなされて人民のために御力をつくしなされたことや、神武天皇が東國へ遷都遊されたところまで書いた。

一、なほ附錄の八束水臣津野命の「國引き」と「天之日矛命」の二篇は、系統的な神代史には直接關係なきものであるから、こゝには單に一の挿話(エピソード)として書いた。また「官國幣社」及び「伊勢神宮」のことは、本文に至大な關係を持つて居るものであるし、「三種の神器」のことは、われ等日本國民ばかりでなく、世界人類の處世上の標準となるべきものであるから、こゝには簡單に解說して置いた。何れ機を見てこの事について書いて見やうと思つてゐる。

著者再識

日本神代物語目次

一、天地創始……一
二、磯馭盧島……四
三、夜見之國……一二
四、穢原之禊……一八
五、誓約生子……二五
六、天地闇黑……三五
七、八俣大蛇……四四
八、因幡白兎……五三
九、蛇之比禮……六〇
十、八千矛命……六七

十一、少彦名命……七九
十二、幸魂奇魂……八四
十三、雉之頓使……八六
十四、鹿島大神……九四
十五、天孫降臨……一〇二
十六、人命夭折……一一一
十七、海幸山幸……一一七
十八、豐玉姫命……一二八
十九、東國遷都……一三四

附錄

一、國引き……一三七

二、天之日矛命……一四一
三、三種の神器……一四六
四、全國官國幣社……一六二
五、伊勢神宮……一八八
六、補遺……一九一

日本神代物語目次終

日本神代物語

小笠原省三著

一　天地創始

大古、天も地も未だ分れなかつた時、大虚空の中に、天御中主神と云ふ神様が御出來になつた。次に高御產靈神、神產靈神と云ふ二柱の神様が續いて御出來になり、何れも配偶のない獨神であつて御身をお隱しなされた。此の三柱の神様をば造化の三神と云つて、凡べて形の有るものの形の無いものも皆此の神様の御偉德に因つて出來るものである。次に天地未だ稚く水の上に脂の浮いたやうにふら〳〵と漂つて居た

時に、宛も葦の芽の泥の中から生へ出るやうなものに因つて御出來になつた神様を宇麻志阿斯訶備比古遲神次に天之常立神と申して此の二柱の神達も亦獨神であつて御身を隱し給うた以上の五柱の神様は勝れて尊い神様であるから、是れを別天神と申し上げる。

次に國之常立神、次に豐雲野神の二柱の神様が御出來になつたが、何れも獨神であつて御身を隱しなされた。

次に男神宇比地邇神、
女神須比地邇神
次に男神角杭神
女神活杭神
次に男神意富斗能地神
女神意富斗乃辨神

次に男神游母陀琉神
女神阿夜訶志古根神
次に男神伊邪那岐神
女神伊邪那美神

と云ふ男女の性を備へた神様が順々に御出來になつた。國常立神と豐雲野神とは獨神であるから各一代宛に數へ、次に雙んで御出來になつた十柱の神々を合せて一代宛に數へて以上を併せて神世七代と申し上げる。

造化の神の御靈德に因つて多くの神々が御出來になつたが、最後に御生れになつた、那岐伊邪伊邪那美の二柱の男女の神様程造化の神の御思召に叶つた神様はなかつた。

ある時此の二柱の神を御召しになつて。

『おん身達二柱の神は今から力を協せて、此の漂へる國を修理固成めよ』

と天の瓊矛と云ふ不思議な靈德のある世にも麗しい矛を御授けになつた。

二　磤馭盧島

若き二柱の神は天神の大命を畏みて、勇躍して御前を退き、旅裝を整へて出發した。そして天上と下界との間に宛も虹の如く長く懸かれる天の浮橋の上に並び立ち遙に下界の有樣を御覽ずるに雲霧茫々と立ちこめて何れが國やら物のあやめも分らなかつた。そこで男神の伊邪那岐神は彼の矛を取り直し、潮をころ〳〵に搔き廻して引き上げしに不思議や其の矛の端から滴り落ちた潮は自然に凝り固つて一つの

島が出來た。是れが游能碁呂島である。

二柱の神達は非常に御喜びになつて、其の島に下り着き給ひ、彼の天の瓊矛を島の上に立てゝ天の御柱と見立て給ひ、此の柱の周圍に八尋の大殿を造つて住みなされた。こゝに夫婦の道を行ひ給ふ前に、天の御柱を行廻つて女神は先づ

『嗚呼麗しい男神よ！』

と言葉を御掛けになつた。次に男神は、

『嗚呼麗しい女神よ！』

と御答へになつたが男神は御心面白からず、

『われは男であるから先に言葉を掛くべきものである』

と仰せられた。そして始めて夫婦の道を行ひになつて、蛭子と云ふ御子を御生みになつた。然るに此の御子は三歳になつても脚が立たな

かつたから葦船に入れて遠く流してしまはれた。次に淡島を生み給
うたが是れも御子の數には入れない。
茲に二柱の神は御相談して、
『今まで生んだ子は二人とも御子の數には入れ難いものばかりであ
る。必ず是れには深い因縁があるに違ひない。先づ天神の仰せを承
つて來やう』
と二柱の神はやがて天に上り天神の御前に一部始終を申し上げた。
すると天神は太占にトつて、
『女神が先きに言葉をかけたから惡いのだ』
と御敎へになつた。
そこで二柱の神は御前を退出き磐馭盧島に降り着き、天の御柱を廻り
合うて今度は先づ男神は、

『嗚呼麗しい女神よ！』
と申された。女神は續いて
『嗚呼麗しい男神よ！』
と御答へになり順々に次の國々を御生みになつた。
先づ淡道之穗之狹別島次に伊豫之二名島此の島は身一つにして面が
四つあり面毎に名がある。即ち伊豫の國を愛比賣、讃岐國を飯依比古、
粟國を天宜都比賣、土佐國を建依別と云ふ、次に隱伎之三子島を生み給
うた。亦の名は天之忍許呂別と云ふ。次に筑紫島を生み給ふ。此の
島も亦身一つであつて面が四つあり、そして面毎に名を持つて居る。
即ち筑紫國を白日別と云ひ、豐國を豐日別、肥國を建日向日豐久士比根
別と云ひ、熊曾國を建日別と云ふ。次に伊岐島を生み給う伊岐島の亦
の名は天之狹手依比賣と云ひ、次に佐渡島を生み、次に大倭豐秋津島亦

の名を天御虚空豐秋津根別と云ふを生み給うた。此の併せて八島を大八島國と云ふ。

斯く八つの島を生み給ひて、後游能碁呂島に歸りなされる途中に、吉備兒島亦の名を建日方別、次に小豆島亦の名は大野手比賣、次に大島亦の名は大多麻流別、次に女島亦の名は天之忍男、次に雨兒島亦の名を天雨屋と云ふ併せて六島を生みなされた。其の他處々の小島は皆潮が凝り固つて出來たものであると云ふ。

こゝに男神伊邪那岐神は碁呂島に御歸になり今まで生みなされた島や國を御覽なさるに、たゞ霧のみ立ちこめてあつた。そこで『わたしの生んだ國は唯朝霧のみが立ち籠めて居る』と仰せられて、霧を吹き拂ひ給う時の御息に因つて、志那都彦神、志那津比賣神と申す風の神樣が出來た。

斯くて、二柱の神は多くの國を御生みになつた後に更らに山川草木海陸の神々を御生みになつた。

先づ、大事忍男神、石土毘古神、石巣比賣神、大戸日別神、天之吹男神、大屋毘古神、風木津別之忍男神を御生みになり、次に海の神大綿津見神、次に港の神速秋津日子神、次に女神速秋津比賣神を御生みになつた。

此の速秋津日子、速秋津比賣二柱の神は河海に因つて沫那藝神、沫那美神。

頬那藝神、頬那美神、

天之水分神、國之水分神。

天之久比奢母智神、國之久比奢母智神、

の八柱の神々を生みなされ、次に木の神、久々能智神、

山の神、大山津見神、
野の神、野椎神、
合せて四柱の神々を生みなされた。野椎神はまた草の祖に坐ますから、草野比賣とも云ふ。
此の大山津見神と野椎津とが、山野に因りて持ち分けて生んだ神々は、
天之狹土神、國之狹土神、
天之狹霧神、國之狹霧神、
天之闇戸神、國之闇戸神、
大戸惑子神、大戸惑女神、
以上八柱の神々は、大山津見神と野椎神との御子である。
次に二柱の神は天之岩楠船神、亦の名は天島船と申す神を生み給ひ次に大宜都比賣神を生み、次に火の神なる火之迦具土神を生みなされた

のが原因で、伊邪那美神はとう〳〵御病氣にかゝりなされ夜見國と云ふ遠い國へ御出でになつてしまつた。御病中にも亦、金山毘古神、金山比賣神と申す金の神を始め、水の神なる水波能女神、土の神なる埴安彦神、埴安姫神の神々を御生みになつた。
たゞ一人取り殘され給うた男神の悲嘆やるせなく、在りし女神の御姿が、まざ〳〵と目に見ゆるが如く、日も夜も分ちなく戀ひ慕ひ、御名を呼びなされるが、遠い夜見國へ聞こゆる由もない。さるにても憎つくきは彼の迦具土神、たゞ一人の子に因つて、慕はしい女神が御病氣になつたのだ、と御憤りの餘り、腰に帶びたる十握にも餘る劔を拔いて迦具土神を三段に斬りなされた。
すると其の劔から滴り落ちた血が傍の岩に注ぎついて、磐裂神、根裂神と云ふいとも猛々しい神等が生れ、又迦具土神の御體からは、八柱の神

々が生れた。其の劔の名は天之尾羽張と云ふ名劔である。

三　夜見之國

天神の大任を末だ果し給はぬ中に、女神伊邪岐神は黄泉の國へ御出でになつてしまはれたので、男神は此の後誰と共に國土を治むることも出來ず、雨の夜も風の日もたゞ女神のことのみ思ひ煩うてゐた。

『今一度わが女神に逢うて此の國を治めなければならぬ』

と男神は切なる御心を押ゆるに由もなく、ひた走りに走つて遠き道も御厭いとひなく夜見國へと御着きになつた。

とゝろく胸を押し鎮め、門の戸をほと〳〵と叩いて案内を乞へば、内より微かに應答して騰戸押し上げて御出でになつたのは、まがう方なき伊邪那美神であつた。

男神は、嬉れしさ、なつかしさ、たとふるにものなく、

『おゝ女神よ！』

と呼びかけたまゝ暫が程は其處に御立ちになつてゐた。やがて、

『おん身と共に作つた國は、未だ出來上らない處が多くある。今一度歸つて、私と國を作つては呉れまいか』

と、聲もおのゝいて吁き給へば、

『御言葉は身に染みて恭う御座りますが、妾はもう夜見之國の汚れたものを喰べてしまひました。あゝ、もう少し早く御出で下されたなら！』

と胸に手を當てゝ深い吐息をしてゐられたが遙々と尋ね來られた男神の御心を思ひ、

『あなたが斯うして御出で下されたのだから、此の事を夜見の國の神

に話して、なるべくは歸るやう致しませう。其の間は何んな事があらうとも、決して此の内を覗いては下さいますな。』

と固く念を押して、一間の内に御這入りになつた。

男神はつくねんとして女神の出で來るを待つてゐられたが、なか〳〵に御出でにならない、其の中に早や日も暮れかゝつて、うすら寒い風が吹いて來た。廣い大殿の中は森として物音一つしない。やがて、夜の帳が四邊をこめて靜かに更けてゆけども、女神の御姿が見えない。

思ひわび、待ちくたびれて、先刻女神が堅く云ひ置いたことも打ち忘れ、そうつと奥の方を覗いて見たが、腥い風が吹くばかりで、闇の中には何物も見えなかつた。

ふと思ひついて、左の御髻に差してゐた、櫛の男柱を一つ闕き一つ灯を燭して御覽なされると、こは如何に、女神は在りし世の美はしき姿に似

もやらぬ醜き骸となつて倒れてゐた。それのみか、邊には見るも怖しい八つの雷神が居り、異臭鼻をついて何んとも云へぬ凄い有樣であつた。

さすがに猛き男神も、此のうたてき樣を見て、驚き給ひ、

『私は思はずも穢い國へ來てしまつた』

と其の儘逃げ出さうとした。すると女神は御體を起し給ひ、

『何故先に申したことを御用ゐにならず、妾に恥を見せたのですか』

と御恨みになつたが、男神はそれに答へやうとせず、一散に外へ馳け出された。

女神は非常に御怒りになり、

『それ醜女！』

と下知し給へば、女神の配下の女軍の一隊は疾風の如く、伊邪那岐神の

後を追ひかけた。男神は足を宙に逃げ給へど、案内を知れる黄泉醜女に及ぶべくもない。あはや追ひ付かれやうとした時に、思慮深き男神は黒き御髪を取つて投げ給ひしに、紫色の葡萄の實に化つた、醜女共は此の麗しき葡萄を見て男神のことも打ち忘れ爭うてむさぼり食う中に、男神は數町逃げ延び給うたが、又も追ひ付かれそうになつたので、今度は右の御髪に刺るせ櫛を引き闕いて投げ給ひしに、不思議やそれが、筍の子となつて生へた。

もとより喰ひ意地の汚い醜女等、われ先きにと拔き食う中に又々逃げられた。

是れを見た女神は醜女にては間ぬるしと思ひけん、彼の八種の雷神に數千の黄泉の軍勢を副へて男神を追擊させた。

男神は、十握の劔を後手に振りつゝ、黄泉の國の境なる黄泉平坂に逃げ

延び、其の麓の桃の實を三つ取つて投げ付けたら、さしもの夜見の軍勢共も、悉く逃げ歸つた。

伊邪那岐神は、非常に御喜びになつて、其の桃の木に仰せらるゝには、

『汝は今われを助けたる如く、葦原中國の人等を助けよ』

と仰せられて、大迦牟豆美命と云ふ名を御授けになつた。桃は惡鬼を拂ふ、と云ふのは是れから始つたことである。又夜櫛を投げたり、一つ灯を燭したりするを忌むのは斯かる話があるからである。

扨伊邪那美神は、逃げ歸りしもの共の話を聞き、今度は御自身追ひ掛け給ひ、黄泉比良坂に至り給うたが、男神は千引の岩を隔てゝ女神と相對ひ給ふた。

男神は、今日よりは夫婦別れをすると仰せられた時に、女神は御怒りの聲も鋭く、

『麗しいわが男神よ。あなたが斯やうに情ないことをなさるなら、今からあなたの國の人民を一日に千人宛絞り殺しますから』

と申した。すると男神は、

『おん身が一日に千人殺すなら、私は一日に千五百の產屋を建てゝ子を生まう』

と、すぐ御答へなされた。此の故に、我が國では死ぬる人よりも生るゝ人が多いのである。二柱の神は此處で永久に御別れになり、女神は夜見へ御歸りになり、黃泉大神とも、道敷大神とも申し上げる。其の黃泉ら坂に塞がれた石を道反大神、又は、塞坐黃泉大神とも云ひ、黃泉比良坂は今の出雲國意宇郡伊賦夜坂とも云ふことである。

四　檍原之禊

伊邪那岐神は、夜見の國へ御出になつたことを後悔なされて、

『私は醜く穢らはしい國へ行つて來たから、先づ禊して此の體の汚穢を洗ひ淸めなくてはならぬ』

と仰せられて、筑紫の日向の橘の小門の檍原に御出でなり、御禊をしやうとして、先づ其の御身に著けて居るものを投げ棄て給う時に、合せて十二柱の神々が生れた。

先づ、

御杖には衝立船戸神
御帶には道之乳長齒神
御裳には時置師神
御衣には和豆良比之大人神
御褌には道俣神

御冠には、飽咋之大人神、
左の手御手之手纏には奥疎神、奥津那藝佐彦神、奥津甲斐辨羅神、
右の御手之手纏には、邊疎神、邊津那藝佐彦神、邊津甲斐辨羅神、
此の十二柱の神々は、伊邪那岐神の御身に御着けになつてゐるものを
背ぎ棄て給ふて出來た神である。
こゝに伊邪那岐神は、
『上の瀨は瀨早く、下の瀨は瀨弱い』
と仰せられて、初めて中の瀨に下り立ち、水の中を潜りつゝ滌ぎ給ひし
時に、八十禍津日神大禍津日神と云ふ、二柱の神が出來た。此の神は、夜
見の國へ御出でになつた、汚れに因つて出來た神である。
次に其の汚れを直さんとして、神直日神、大直日神、伊豆能賣神と云ふ三
柱の神が御出來になられた。

次に水底に沈み滌ぎ給う時に、
底津綿津見神、底筒之男命、
水の中に潜り滌ぎ給う時に、
中津綿津見神中筒之男命、
水の上に浮び滌ぎ給う時に、
上津綿津見之神上筒之男命、
と申し上げる併せて六柱の神が御出來になつた。
此の三柱の海津見神は筑紫の志賀の大神であつて、海人を監督する阿
曇連等が祖神として祭る神である。又、底筒之男神、中筒之男神、上筒之
男神の三柱の神は、墨江之三前の大神と申して、今は、攝津國住吉郡住吉
神社に御鎮りになつてゐられる。それから、左の御目を洗ひ給う時に
御生れになられた神は、撞賢木嚴之御魂天疎向津比賣命と申し、亦の御

名を天照大御神とも申し、又、大日靈命とも申し奉る神である。

次に、右の御目を洗ひ給うた時に、月夜見命、御鼻を洗ひ給うた時に、建速須佐之男命と云ふ合せて三柱の御子が御生れになつた。

此の時、伊邪那岐命は、

『私は今まで多くの神々を生んだが、最後に此の三柱の尊い子を生むことが出來た』

と、非常に御喜びになつた。

其の中にも天照大御神は、御女性であらせられたが、生れながらにして御身の光華麗しく、天地の間に輝いてゐられたので父命は、

『かやうな貴い御子は、此の國へ留め置くべきでない』

と思はれたので、

『おん身は、高天原を治められよ』

と仰せられて、常に御頸にかけてゐられた、美しい珠を、さら〳〵と音をさせて天照大御神に御授けなされた。

天照大御神は、畏みて仰せを承て、高天原に御出でになり、朝夕其の珠を禮拜して、孝養を御つくしなされた。これは我が國の神棚の始めであつて其の珠をば御倉棚之神と申し上げる。

次に、伊邪那岐命は、月夜見命、須佐之男命を御前に召し給ひ、

『月夜見命は、夜の食國を、須佐之男命は、海原を治めよ』

と仰せられた。

月夜見命は、姉君なる天照大御神に亞いで、光り麗しかつたので、高天原に上せて夜之國を治めしめ、須佐之男命は、強く猛々しい神であるから天下の主となし給ひ海外の諸國をも治るしめられたのである。

斯く、父命伊邪那岐大神の仰せのまに〳〵、三柱の尊い神達は、各々其の

國を分ち治められてゐられたが須佐之男命ばかりは、御鬚は胸先に垂るゝまで、小兒の如く泣きむづかり、青山も枯山に泣枯し、河海をも悉く哭乾す程であつたので、多くの惡い神が處々に起つて、世の中は麻の如く騷ぎ亂れた。ある日、伊邪那岐命は、須佐之男命を御召しになり。

『おん身は何故に國を治むることもせず、小兒の如く泣きむづかるのか』

と問はせられた。すると命は、

『私は母命の在はす夜見の國へ行きたいので、毎日泣いて居るのであります』

と答へられた。すると伊邪那岐命は、非常に御怒り遊され、

『宜し。汝のやうな者は一日も此の國へ置くことは出來ない。疾く疾く出て行け！』

と追ひ出してしまはれた。けれども須佐之男命は、直ぐに往き給はず、

『私は先づ高天原に居られる、天照大御神に此の事を申上げてから、夜見之國へ參ります』

と御願ひ申した。伊邪那岐命は是れを御許しなされた。

さて伊邪那岐大神は、さきに天神の仰せを承け奉りて、此の國を修理り固成なすの大任は、こゝに全く御成功なされたので、天に上つて天神に御報告申し上げ日の若宮と云ふところに永く御鎮りになられた。又、我が國では、其の御靈を近江の多賀に齋き祀つてゐる。

五　誓約生子

勇猛無雙き須佐之男命は、高天原なる御姉君天照大御神に逢ふために、遙々と昇り給う時に、其の健き勢の爲めに、山川草木ことごとく震動し

た。

大御神の御傍を去らず仕へ奉れる、天之宇受賣命、は早くも此の有様を見て取り、大御神の御前に告げ奉つた。

こゝに天照大御神は、もとより須佐之男命の勇猛なること知り、今亦、其の昇り來給う狀を見て、驚き怒り給ひ。

『さてはわが弟の上り來るは、必ず正しき心ではあるまい。定めし此の高天原を奪ひ取らん爲めだらう。其の用意をせねばならぬ』

と仰せられて、先づ御髮を解きて御髻にし給ひ、左右の御髻にも御鬘にも亦、左右の御手にも各、八尺勾珠をつけ、御背には千箭の靫を負ひ、五百箭の靫を附け、臂には嚴の高靫を佩き、御弓を振り立て、御劍の柄を取り握り、益荒夫の姿になつて、大庭に下り立ち大地を踏みしめ給ひて、今や遲しと待ち給う。

須佐之男命は、斯かる事ありとは夢にも知り給はず、持前の元氣滿ち溢れ、やがて御姉君の前に立ち給うた。

此の時、天照大御神は御怒りの聲も鋭く、

『わが弟は何故に父命の授け給う國を治めもせず、わが國へ上つて來たのか』

と責めなされた。

須佐之男命は、御姉君の御怒りに先づ驚き給ひ、

『姉命よ、私はもとより惡い心があるのではありませぬ。私は日毎夜毎泣きむづかるわけを父命が問ひ給ひし時に、母命の在はす夜見國へ行き度いのでかく泣くのでありますと答へたら父命は大に御怒りなされ汝は此の國へ置くことは出來ぬと仰せられたので、今一度姉命に逢ひ奉り其の後夜見之國へ參らうと思ひ、父命の許しを得て遙々上つ

て來たのであります』

と辯解なされたが、天照大御神の御心はなか〳〵に溶け給はず、

『しからば、おん身の心の清く明るいことは、何をもつて證據とするか』

と問ひなされた。

須佐之男命は答へ給ひて、

『姉命がまだ御疑ひさるゝなら、今茲で誓約をして各々子を生みませう。もし私が生んだ子が女神であるなら汚い心があり、男神なら清い心であると思召し下さい』

と申し上げたので、大御神はそれを御許しなされた。

そこで、二柱の神は、天之安河を中に、相對ひて立たゝせ給ひ、大御神は先づ、須佐之男命の佩き給へる十握の劍を乞ひ取り、三段に打ち折つて、天の眞名井と云ふ井の水に振りそゝぎ、それを又、御口に嚙んで吹き棄て

給う御息の狹霧に因つて現れ給うた神は、多紀理比賣命、市寸島比賣命、狹依比賣命と申す、三柱の女神であつた。

次に須佐之男命は、大御神の左の御髻に纏き給へる、八尺勾珠を乞ひ取り、天之眞名井にゆら〳〵と振り滌ぎ、是れを嚙んで吹く御息に因つて御生れになつた神は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命と申します。次に右の御髻に纏き給へる珠を乞ひ取りて、天之眞名井に振り滌ぎ是れを嚙んで吹き給う御息によつて、天之穗日命と申す神が御生れになつた次に御鬘に纏き給う珠に因つて、天津日子根命、又左の御手に纏き給う珠に因つて、活津日子根命、亦、右の御鬘に因つて、熊野久須毘命と云ふ合せて五神の男神が御生れなされた。

こゝに於ては、天照大御神は、弟命の惡しき心にあらざるを始めて御分りになり、さて仰せ給うには、

『此の後に生れた五柱の男神は、元來自分の持つてゐる珠に依つて出來たものであるから、わが子である、又、先にわが生んだ三柱の女神はお身の佩いて居た十握の劍に依つて現れたものだから、おん身の子である』

と仰せられて御養育なされた。

大御神は別けて天之忍穗耳命を殊に御寵愛し給ひ、常に御腋に懷きて育て給うた。是れによつて、此の神を腋子とも申し上げる。須佐之男命は五柱の男神を生み給うた後、

『私の心は清く明るい故。男神を生んだ。此に依つて云へば、自ら私が勝つたのだ』

と仰せられて、また〳〵猛き心を起して絶へず亂暴しなされた。

殖產興業に御力を御盡しなされた天照大御神は、御親ら天之長田、狹田と云ふ田を作らせ給ひ、苗を植え稻を苅り給うた。しかるに、須佐之男命は、大御神の作り給へる田の、或は畔を毀ち、溝を埋めて、水を引く便を失はしめ、或は水を堰き貯へ置く桶口を打ち破つて、其の水を流し棄て一度種を蒔きたる上に又種を蒔き、秋は田の中に串を刺し、稻の實れる時に天之斑駒を放ちて其の中に伏せしむるなど數々の亂暴をなされた。

又、或る時、大御神の新嘗きこし召す時に、其の新しき宮殿の下に陰かに汚いものを入れなどした。

須佐之男命は、斯く亂暴しなされたが、大御神は恩愛の御心もて、決して惡い御顏はなさらず何時でも善い方に詔り直して、少しも御咎めなさらなかつた。けれども須佐之男命の亂行は一日も止むことはなかつた。

ある時、大御神は、須佐之男命に向ひ給ひ、

『葦原の中國に宇氣母智神と云ふ、農事に精しい神があると聞いて居るが、おん身は今其の神のもとへ行つて篤くと見定めて來なさい』

と仰せられた。命は葦原の中國へ降り給ひ、宇氣母智神のもとへ行つて案内を乞うた。

宇氣母智神は高天原より須佐之男命が御降りになつて、御出でなられたと聞き恭しく上座に拓じて慇懃に招待した。

須佐之男命は、先づ食物を貰ひたいと申し入れると、畏つて、鼻口尻などから、種々の食物を取り出し、それを調理して、大きな机の上に置き並べて饗應した。

是れを見て居た須佐之男命は大いに御怒りなされ、

『無禮な奴め！　高天原のわれに穢ら』はしき尻口より出したる食物

を進むるわ！』

と、腰なる劔を拔く手も見せず、無慘にも此の神を殺し給うた。そして席を蹤つて高天原に還り給ひ、大御神に其の由を申し上げた。大御神は、それを聞き給ひ御機嫌惡しく、

『おん身は惡い神である』

と仰せられて、暫く御逢ひにならなかつた。そして直ぐに、天熊之大人と云ふ神を御遣はしになつて、其の樣を見屆けさせると、宇氣母智神はまことに死んでゐた。そして其の體の上には、粟稗、稻麥、豆などの野菜が生へ、桑や蠶や牛馬の類がゐた。

天熊之大人は、それを盡く持ち歸り、大御神に奉りしに非常に御喜びになつて、

『此の物は愛しい、わが國民の食ひて活くべきものである』

と仰せられて、粟、稗、麥、豆を畑の種子と定め、稻を田の種子と定め給ひ、又天邑君を定めて、其の稻種を天之狹田、天之長田に殖えさせ給ひしに、其の秋には多くの米を得ることが出來た。

また天香山には、桑を殖え蠶を養つて、系を抽ぎ、機を織る業も御始めになつた。天照大御神は斯くの如く農事も親らし給ひ、又日夕祖先を祀り給うた。ある時天つ神に奉り給う、御衣を織り給はんとして、御身を潔めてひたすらに機を織り給う時に、須佐之男命は、天之斑駒を、生きまゝに皮を剝ぎ、頂を穿ちて墮し入れたので、大御神は畏くも、おん身を傷め給ひ、御傍の織女は驚いて死んでしまつた。

大御神は、これに因つて非常に御怒りなり、

『おん身は未だ尙ほ汚い心がある』

と仰せられて、天之窟に入り給ひ、其窟戸を閉して、おん身を御隱しなされた。

光華が天地の間に照り輝く大御神が窟の中に隱れ給うたので、高天原は夜の如く暗く、葦原中國も晝夜の分ちなく、多くの惡しき神が處々に起つて、世の中は亂れに亂れた。しかも、永久の夜は限りもなく續いた。

六　天地闇黑

今は、夜も晝も別ちなく、皆燈火を燭して事を辨ずるやうになつた。

高天原にては、八百萬の神々は、いかにともすべき手だてを知らず愁ひ迷ひてゐられたが、斯くてもあるべきことならねば、諸々の神達は、天の安河原に御會合になり、いかなる業をして、大御神の御怒りを和げ奉り、岩屋から御出し參らせやうかと、御相談になつた。

此の時高皇產靈尊の御子に、八意思兼神と云ふ神があつた。深謀遠略

多くの神々の中に、勝れてゐられた。高皇産靈尊は此の神に一切を御任せなられたので、惡兼神は遠く謀り、深く思ひて。

『天照大御神の御象を作り、また種々の計謀をして祈禱り奉れば、必ず岩屋を御出であるに違ひない』

と申された。

其處で、思兼神の申すまゝに八百萬の神々は一致して其の準備に取り掛つた。

先づ、常世の長鳴鳥を集め來りて鳴かしめ、天の安河の河上の天堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛冶天津麻羅を招びて、岩凝度賣命に命じて鏡を作らしめ、玉祖命には、八尺の勾珠を作らしめ、天兒屋根命、布刀玉命を召して、天の香山の牡鹿の肩骨を丸拔きに拔いて、天の香山の波波加櫻を取りて占はしめ、天の香山の枝葉のよく茂れる、眞賢木を堀り取り、上の枝には、八咫勾珠を取り着け、中の枝には、八咫鏡を取り懸け、下枝には、白丹寸手、青丹寸手を取り垂れて、これらのものは、本王命は自ら捧げ奉り、天兒屋根命は、麗しき詞を綴りて祝辭を讀み、天手力男命は、岩戸の傍に隱れ立ち、天宇受賣命は、天の香山の日蔭蔦を手次に繫けて眞折蔦を鬘として、天の香山の笹葉を手に持ちて、岩屋戸の前に桶槽伏せて踏みとゞろかし、巧みに滑稽けたる業をし、宛も神の乘り移つたやうな樣をして、

『ひとふたみよ
いつむゆなゝ
やここのたり
もゝちよろづ』

と云ひて相共に歌ひ舞ふ時に、天之宇受賣命は、胸を擴げて乳を出し着

物の緒を長く垂れて、なほも躍り舞ふたから、八百萬の神々はあまりの可笑しさに聲を揚げて一齋に笑ひ動めいた。

天照大御神は、岩屋の中に居給ひて、此の樣を聞き給ひ、御心に異しと思し召し給ひ、また、天兒屋根命の申し給へる、祝辭を聞しめして、

『此の頃稱詞を申す神は多くあるが、今まで此やうな詞の麗しい稱辭を聞いたことはない』

と仰せられて、天の岩屋の戸を細目に開け給ひ、

『わたしが此の岩屋に幽り居るによりて高天原も葦原の國も皆闇からうと思つてゐたが、何故に天之宇受賣は遊びて、また八百萬の神達は笑ふのか』

と、岩屋戸の内から仰せられた。

天之宇受賣命は、

『大御神に勝つて貴い神がゐられるので、私共はかうして樂み遊ぶのであります』

と答へ奉つた。

斯く御答へ申し上げて居る間に、天布刀玉命は、かねて用意し置いた彼の鏡を差し出して、大御神に示し奉つたから大御神はます〳〵異しい

と御思し召して、少しく戸を出でて其の鏡を御覽なさらうとした時、傍に隱れて居た、天手力男命は岩戸を引き開け、大御神の御手を取つて出し參らせた。布刀玉命は早くも尻久米繩を、大御神の御後方に引き渡して、

『これより内には、再び還り入らせ給ふな』

と申して大御神を新しき宮殿に遷し奉り天宇受賣命を御前に侍らせ、櫛岩窓命豐岩窓命に其の御門を守らせ、天之太玉命は大殿祭、御門祭の

業をして仕へ奉つた。
天照大御神、天の岩屋を出で給ひし時、高天原も、葦原の中國も、自ら照り明るくなつて、八百萬の神々は、互に御顔を見給ひしに、皆白く明かに見えた。
そこで、あまりの嬉れしさに、手を伸べて歌ひ舞ひ、

『あはれ
あなおもしろ
あなたのし
あなさやけ
おけ』

と唱へ給うた。
天照大御神の、天の岩屋から御出ましになられた後に、八百萬の神だち

は、共に相談して、須佐之男命の犯し給へる諸々の罪を被はしむるために、多くの品物を出させて其の代償とし、また、髮鬚を切り手足の爪を拔かしめて、高天原から追ひ下してしまつた。
天上を追はれた、須佐之男命は、今は宿るべき家もなく、霖雨がしきりに降る中に、青草を結び束ねて蓑笠に着て、道を辿らせ給ひ、夜は宿を請ひ給へども、誰一人として御宿を貸し給う神はなかつた。
雨ふり、風吹けども、須佐之男命は、休み給うことが出來ず、つぶさに辛苦を嘗めつゝ降り給うたが、途中にてつく〳〵思ふやう、
『私は今、諸々の神に逐はれて永く夜見之國へ往かねばならぬ。けれども今一度び、吾が姉命に逢うてそれから後に往かう』
と仰せられて、高天原に上り給ふた。
大御神は此のことを聞き給ひ、

『わが弟命のまた上り來たれるは、必ず善き心ではあるまい』

と仰せられてゐらるゝ處へ、須佐之男命は早くも上り着き、

『私は惡い心は決してありませぬ。今また上つて來たのは、諸々の神に逐はれて、是れから永く夜見之國へ行かねばなりませぬ。けれども姉命と逢はずに、如何して去ることが出來ませう。一度でも御逢ひ申したいと思つて、ほんたうに清い心をもつて復上つて來たのであります。今すでに姉命と逢ひまつり何も思ひ置くことはありませぬ。諸々の神だちの心のまゝに、永く夜見之國に留るでせう。どうか姉命は平らけく、安らけく高天原を治め給はれ。また私の生んだ五柱の神は姉命に捧げまするから、末長く愛しみ育てゝ下さい』

と、別れの御言葉を申し上げて、また御降りになつた。

須佐之男命は、御子五十猛命と共に天の下を隅なく廻り新羅國へ到り

給ひ、曾戸茂梨と云ふところに御留りになつたが、其處も御氣に召さなかつたので、赤土をもつて船を作り、其の船に乘つて八重の潮路を遠く渡り來て、出雲國の安來の埃の川上に御着きなされ、

『わが心は安く平らけなつた』

と仰せられて、暫く其處に御留りになつた。命はまた多くの樹種を植ゑ給ひ、

『杉と樟は船を作り、檜は宮殿を作り、槇は人民の家を作るがよい』

と仰せられて各々其の用法を定め給ひ、また人々の食ふべき樹種子も植えられた。

命の御子、五十猛命は、高天原から降つた時に樹種を多く持ち歸つたが、新羅の國へは一つも植え給はず、わが國の筑紫國から始めて、大八洲國の内殘るところなく植えられた。

五十猛命は亦の名を大屋毘古神とも申し、また韓國へ御出でになつたから、韓國乃伊太祁曾神とも申し上げる。

斯く、樹を植え給ひし貴き神であるから後に有功之神とも申し紀伊國へ鎮ります大神である。

七　八俣の大蛇

須佐之男命は安來と云ふ處に暫らくの間御留りなつて、或は山に樹を植え、或は田を墾し、藥を作つて人民の病を治しなどしてゐられたが、出雲國簸の河の邊を河に沿うて上らせ給ふた。

兩岸には、晝猶ほ暗き深林は限りなく立ち茂り、折々、怪しき鳥の鳴き聲の外、寂として物音もなく、河の水は其の間を靜かに流れてゐた。命は、鳥上の峯に上つて、水面を眺めて居られたが、動くとも見えぬ水の上に、

一本の箸が浮いて、靜かに流れてゐた。

『さては此の河上に人が居る』

と思し召し、なほも樹の根、岩角を踏み越えて、河上へと進ませ給うた。

早や日も暮れかけて、さわ〳〵と林の上を風が吹き渡り、碧き水面は黑ずんで見えた。

すると、行手に當つて、微かに人の泣き聲が聞えた。

『はて怪しい、今のは確かに人の泣き聲のやうだが』

命はわれと吾が耳を疑つてゐられたが、進むに從つて風のまに〳〵明かに聞えて來た。

やう〳〵辿り着いて見ると、其處には夜目にも輝くばかり美しい一人の若い娘を中に、其の兩親とも見ゆる二人の年老つた男女が、娘の背中を撫で摩り聲を立てゝ泣いて居た。

命は此の有様を見て、
『おん身達は何故に泣いて居らるゝのか』
と優しく尋ねられた。
老翁は答へて、
『私は足名椎、妻は手名椎と申して、是れなるは私共の娘で、櫛稲田姫と申します。元私には八人の娘がありましたが、高志の國の八俣大蛇と云ふものがあつて毎年來ては一人宛の娘を喰つて、すでに七人まで取られてしまひました、今はたゞ此の娘一人殘つたのに、今年も其の大蛇が來て娘を喰はうとして居るので、娘と別れるのが辛くて斯うして泣いて居るので御座ゐます』
と泣き〳〵答へた。
命は重ねて、

『して其の大蛇は如何なる形をして居るか』
と問はせられた。
『其の大蛇は身が一つでありながら、頭が八つあり、尾も亦八つあり、眼は赤酸醬の如く、體には蘿や檜杉などが生へて、其の腹を見れば、何時でも血が浸み出で、體の長さは、あの山を卷てもなほ餘る程な、それは〳〵怖しい怪物で御座りまする』
と告げた。
勇猛雙びなき命は是れを聞かせ給ひ、
『宜し。その大蛇は俺がきつと退治してやる。其の代り、その娘を俺に捧げよ』
と仰せられた。老翁は、
『恐れ多けれど、あなた様は何誰でゐらせられまするか』

と問ふた。

命は少し微笑ませられ、

『俺は高天原の天照大御神の弟名は須佐之男命ぢや』

これを聞くと三人等しく地にひれ伏してしまつた。そして老翁は恐る恐る頭を上げて、

『不束では御座ゐますが娘は献げまする』

と、嬉れし涙にむせんで御答へ申し上げた。

そこで命は、櫛稲田姫を一つの櫛に取り化して御髻にさし給ひ、二人の者に向ひ給ひ、

『おん身等は是れから直ぐに木の實をもつて、毒酒を醸し、また垣を結ひ廻らし、其の垣に八つの入口を設け、入口ごとに八つの棧敷を構へ、其の上に毒酒を容れたる酒瓶を置いて待つて居るがよい。俺は必ず其

の大蛇を殺して娘を助けるであらう』

と仰せられ、其の準備を命ぜられた。

足名椎、手名椎の兩人は大いに喜んで、命ぜられた通りに毒酒を醸し、棧敷を構へなどして準備が全く出來上つたので、たゞ此の上は大蛇の出で來るを待つばかりである。

夜も次第に更け渡つて、聞えるものは草叢にすだく蟲の音のみ、天地は靜寂としてそよ、と吹く風もなきに、俄に山鳴り地動くかと思へば一陣の腥き風がさつと吹くと、今まで燈して居た灯は悉く消えて、向ふの谷間に爛々と炬の如く輝くものが見えたかと思うと、疾風の如く飛び來つた八俣の大蛇。

待ち設たる須佐之男命は少しも驚き給はず、大蛇の傍近く進ませ給ひ

『汝は畏き神である。先づ此の酒を飲み給へ』

と親ら酒を其の八つの口毎に注ぎ入れ給うたので、大蛇は大いに喜び果ては瓶に首を差し入れて飽くまで貪り飲んだので、さすがの大蛇も全身に毒が巡つて、其のまゝ其處に醉ひ伏して寢てしまつた。

命は此の時をうかがひ、佩き給へる十握の劔を拔いて、先づ大蛇の頭を斬り給へば、血は流れて泉の如く、大蛇の怒り叫ぶ聲に天地も崩るゝばかり、命は鮮血を浴びていよ〳〵勇躍して更に胴を寸斷し、尾を斬り給う時に、さすが名劍もカチリと音がして刃が少し缺けた。

『はて何んだらう』

と思し召して、劍の鋒をもつて大蛇の尾を割いて見ると、中から一振りの劍が出た。乃ち清水に血を洗つて見ると、明晃々として尋常一樣の劍ではない。命は大いに御喜びなされて高天原なる天照大御神に獻上した。これが即ち三種の神器の一なる草那薙之劍である。此の大

蛇の居る上には常に天雲が立ち騰つて見えたので、此の劍を天之叢雲劍と云ひ、後景行天皇の御代、日本武尊が東國の蝦夷御征伐の時、草をなぎ拂つて賊を征伐し給うたので、草那薙之劍と申し上げ今、尾張の熱田神宮に御祀り申してゐる。

さて須佐之男命は、首尾よく大蛇を退治し給ひ、櫛稻田姫を御妃として、宮殿を造るべき地を求めつゝ、出雲の國の須賀と云ふ處に御着きになつた。そして、

『私は此地に來て心がすが〳〵しくなつた』

と仰せられて、其の地に立派な宮殿を御造りになつた。今に其の地を須賀と云つて居る。命は須賀の宮殿を御作りになり給うた時其處から白い雲がゆら〳〵と立ち騰つたのを御覽なされて、

『八雲立つ出雲八重垣妻ごめに

八重垣つくる其の八重垣を』

と云ふ御歌を詠みなされた。

一首の意は、『今須賀の宮を立てゝ稲田姫と共に籠らんとする折に、八重雲が起つた。此の雲の様は、吾と稲田姫との閨に八重の垣をこしらたやうである。まことに目出度い吉祥を見する其の雲の八雲垣よ』

と此の歌は我が國の三十一字の短歌の始めである。

須佐之男命は、宮殿を御作りになつて後、足名椎神を御召しになり、

『おん身は此の宮殿の首長となりて仕へられよ』

と仰せられて、稲田宮主須賀之八耳命と御名を下された。

命は、櫛稲田姫命との間に御子、八島士奴美命を生み給ひ、また、大山津見神の子、神大市比賣命に遇ひ給ひ、大年神、宇迦之御魂神を御生みになつた。

而して後に須佐之男命は、遂に御妣の命の在はず、夜見之國へ御出でなつて、永く御隠れになられた。

八因幡白兎

須佐之男命の六代の御孫に、大國主命と云ふ神様があつた。

生れながら、武勇絶倫、仁慈の御心また深かつたので、諸々の神の間に其の名が聞え、遂に出雲の國に坐して、豐葦原之中國の主となられた御德のある神である。

命には御名が合せて五つある。大穴牟遅命、葦原醜男命、八千矛命、宇都志國魂命、とも申し上げ、また、國土を守護し給ふ神であるから、大地主命とも申し上げる。斯く御名の多くあるのは、御功績の多い、優れて尊い神で居らるゝからである。

大國主命には八十神として御母の違つた多くの御兄弟の神があるが、後になつて、皆、國を捧げて命に服從してしまつた。

其の頃因幡の國に八上比賣と云ふ非常に麗しい女神が御出でなられた。八十神は各此の女神と結婚しやうと思つて、ある日、大國主命に大きな袋を負はせて供人とし出雲の國を御立ちになり、因幡の國の氣多の濱邊を御通りになつた。すると、道傍に、赤裸に皮を剝がれた一疋の兎が寢て居たのを見て、八十神は欺むいて、

『おまへ此の海の水を浴びて、高い山に登つて風に當れば、必ず元のやうに毛が生へるから』

と敎へたので兎は欺かるゝとは少しも知らず、敎への通り、海に浸り山の上で風に當つて居ると、潮が乾くに從つて、皮が風に吹き裂かれて苦痛さに堪へず、聲を揚げて泣いて居た。

折から袋を負うて、後から御出でになつた、大國主命は、兎を御覽になり、

『おい、おまへは何故泣いて居るのか』

と御問になつた。

すると、兎は

『私は、もと此の因幡の國に住んで居たものでありますが、洪水に流されて、隱岐の國へ漂ひ着き、其處に暫らくの間居ましたが、如何がして、此の國へ還へりたいと思ひましたが、海を渡ることが出來ず、いろ〳〵考へた末、ある日、海邊に出て居る鰐を欺いて、

『おまへの一族は何の位あるか』

と問ふと、

『俺の仲間は海にいつぱいあるぞ』

と鰐は答へたので、私は又欺いて、

『俺の仲間は山にも野にも溢れて居るが、一つ何つちが多いか比べて見やうではないか。それには、おまへは仲間を連て來て此濱邊から、因幡の氣多の崎まで並んで見給へ。俺は其の上を渡つて數へて見るから』と云ふと、鰐は欺かるゝとは知ずに、海いつぱいに並んで氣多の崎まで續いたので、私は其の上を渡つて、今一疋で地に上らうとする時に、『おまへ達は俺に欺かれたんだ。俺は氣多の崎へ渡りたいばかりに、僞を吐いたんだぞ』と申しますと、一番端に居た鰐は怒つて、私を捕へ着物を剝いで此の通り裸にしてしまひました。それで私は寒さに堪へず、道端に寢て居ると、先きに御通りになつた八十神は私を見て、『海水を浴びて、風に吹かれゝば治る』と申したので、其の通りにすると、海水の乾くにつれて、體の皮が風に吹き破られて甚く痛み出すのでかうして泣いて居るので御座ゐます』

と御答申し上げた。

もとより、御惠み深い命はそれを聞かれて、

『それは〳〵可愛い相なことだ。これから直ぐ此の川の水を以つて體を洗ひ、蒲の花を取つて地に敷き、其の上に寢轉んで、蒲の花を體を付ければ、きつと元の通りな膚に療ほる』

と御敎へになつたので、其の通りにすると見る〳〵中に毛が生へ痛も無くなつたので、兎は大いに喜んで御禮を申し上げ、

『あなた樣は袋を負うて居なさるが、情深い神樣であるから、八十神は如何に申しても、八上比賣は必ずあなた樣に御逢ひ申すでせう』

と申し上げた。

此の兎は、因幡の白兎と云ふもので、後の世に兎神とも云つて居る。

扨て、八十神は、八上比賣の家に御出になつて、いろ〳〵と申し上げたが

御聞き入れなく、

『妾は大穴牟遅命に逢ひませう』

ときつぱり斷つてしまつたので、八十神は、大いに怒つて大國主命を殺してしまはう、と相談した。

それから、伯耆國の手間山の麓に行つた時、僞つて大國主命に云ふには

『此の山に大きな赤い猪が居る。俺達は山に上つて、追ひ下すから、おまへは麓に居て其の猪を捕へろ、もし捕へなければおまへを殺してしまうから』

と云つた。正直なそして勇氣のある大國主命は欺かるゝとは少しも知らず、今か今かと麓で待ち構へて居ると、八十神は山の上で、猪に似た大きな石を燒いて、轉がしてよこしたので、大國主命は其の石に燒かれて死んでしまはれた。

御母の刺國若比賣命は大國主命の死んだのを欺き悲んで、急いで高天原に馳せ上り、神產靈神に此の由を申し上げて、

『どうぞ御救ひ下さりませ』

と御願ひした。

そこで神產靈神は、蚶貝比賣と、蛤貝比賣とを御遣はしになつて、大國主命を治療せしめたので、忽ちに活きかへり麗しい姿になつて出で歩かれた。

八十神は、大國主命がまだ生きて居るのを見て、また〳〵惡計を廻らしある時命を誘つて共に山に行き、大木を伐り倒し、其の木に茹矢をうち込み木の口を開いて、命を中に入れて、其の矢を拔いてまた拷ち殺してしまつた。

御母の命は命を探し出して、木を裂いて取り出し、

『おん身は此の國に居れば、終には八十神に殺されてしまはねばならぬ早く紀伊の國の大屋毘古命の許に隱れなさい』

と仰せられて、命を密かに逃がしてしまつた。八十命は是れを聞いて、後を追ひ掛け弓をもつて射殺さうとしたが、命は早くも木の俣から滑り逃れてしまつた。

九　蛇之比禮

大國主命は、八十命の難を逃れて、紀伊國の大屋毘古命のもとに至り、今までのことを申し上げた。

すると、大屋毘古命は、しばらく考へて居られたが、

『おまへは此の紀伊に居るよりも、須佐之男命の坐はす、夜見之國へ行つた方がよからう。須佐之男命は、おまへの爲めにきつと良く取り議

るであらうから』

と仰せられたので、命は又も旅裝を整へて、遙々夜見の國へ御出でになつた。

須佐之男命の御女の須勢理比賣命は、大國主命の威ありて猛からざる御容貌に、御心を通はし給ひ、然る後家に還られて、

『大へん美しい神が御出でになりました』

と、父の命に申し上げた。

須佐之男命は、御自身に御出でになつて御逢ひなされ、

『これは葦原醜男と云ふ神ぢや』

と仰せられ、やがて家に呼び入れて御對面なり、いろ〳〵御物語りなされたが、大國主命を御試しなさるために其の晩は蛇の室屋と云ふ、蛇の多く居る室へ寢かした。

須勢理比賣命は、御自分の夫なる大國主命が、今宵は此の蛇の室屋に一夜を明かさねばならないのを、心もとなく思し召して、蛇の比禮と云ふ寶を御渡しになり、

『もし、蛇が嚙まうとしたら、此の比禮を三度振つて御拂ひになれば、蛇は自然と鎭りますから』

と敎へた。

命は、蛇の室屋に這入つて行くと、案の如く多くの蛇は、鎌首をもち上げて、命を嚙まうとした。そこで彼の比禮を取り出して、比賣に敎へられた通り三度振ると、不思議にも多くの蛇は鎭つて、其の夜は安く過された。次の夜には又呉公と蜂の室屋へ入れられたが、須勢理比賣は、呉公と蜂の比禮を授けて前夜のやうに呪術を敎へなされたから、其の夜も事なく御過しなされた。

須佐之男命はなほも試めそうと思し召され、御自身に鳴鏑矢を野原に射させられ、

『あの矢を持つて來い』

と御命令なされた。

大國主命は、野の中に分け入つて矢を探し求めて居ると、四方から火が燃えて來て危く燒けやうとした。

其の時、何處ともなく鼠が出て來て、

『內は富良々々、外は須夫々々』

と云つた。あやしいと思つて、其處の地を踏んで見ると、深く土の中に陷ちた。しばらく隱れて居る間に、野火は早くも燒け過ぎてしまつた。そこで命は、地の上に御出でになると、其の鼠は鳴鏑矢を持つて來て捧げ奉つた。命は其の矢を御覽なさると、羽がみんな失くなつて居た。

これは其の鼠の子供等が喫ひ取つたのである。

須勢理比賣命は、大國主命の御姿が見えないので、必ず死んでしまつたのだと御嘆きなされ、御葬式の道具を持つて泣き〳〵野の中を御探しなされた。又、須佐之男命も此度は死んだものだと思し召され、野原へ御出でになつた時、大國主命は何事もなく其の矢を持つて須佐之男命に棒げ奉つたので、今度は家に還らせ給ひ、大廣間の中に呼び入れて御頭の虱を取るやうに命令けた。

大國主命は、それを御覽なさると、御頭には虱でなく多くの呉公が居た。

『如何しやうか』

と、さすがの命も取ることが出來かねて居ると、須勢理比賣は、椋の木實と赤土とを御渡になつたので、命は其の木の實を喫ひ破り、赤土を口に含んで唾をし給ふのを見て、須佐之男は、其の呉公を咋ひ破り唾きをす

るのだと思し召して、御心に、大國主命を賞め給ひつゝ其處に寐てしまはれた。

そこで、大國主命は須佐之男命の御髪の毛を解いて室の椽木毎に結び付け、大石を其の室の戸に塞いで、須勢理比賣を背中に負ひ、須佐之男命の秘藏し給へる、生大刀、生弓矢と云ふ精巧なる武器と、天沼琴と云ふ琴を持ち抱へて、其處を逃げ出し給う時に、其の琴が樹に觸れて大きな音がしたので、須佐之男命は、驚いて御目を醒まし給うと、御髪は悉く室の椽木に結ひ付けられてあつたから、早速に解くことが出來ず、其の間に大國主命は遠く御逃げになつた。

やう〳〵に御髪を解き給ひ、跡を追ひ掛け、黄泉比良坂まで至り給ひ、遙かに大國主命を望んで、

『其の汝が持つて居る生太刀生弓矢を以つて、汝が庶兄弟共を追ひ撥

ひて、汝は大國主神となり、亦、宇都志國玉神となつて、吾が女須勢理比賣を嫡妻として、宇迦能山本に宮殿を建てゝ永く國を治めよ」と、御仰せになり、夜見之國へ御還りになられた。大國主命は、出雲へ御還りになり、須勢理比賣をば暫くの間、外に隠し置き給ひ、彼の生太刀、生弓矢を持つて、八十神を御追伐なされたが、もとより猛き命のことゝて多勢の八十神も遂に敵することと叶はず、皆、命の前に服從してまつた。斯くて命は葦原の中國の主となり給ひ、國土を經營し給うたから、大國主命と申し奉り、また此の國の御靈として安穩に守り給う神であるから宇都志國玉命とも申し上げる。また、彼の八上比賣は八十神の云ふ言を聞き給はず、先の約束の如く大國主命に御遇ひになつたが、須勢理比賣命を畏れて、其の御生みになつた子を、木の俣に刺挾んで因幡の國へ御還へりになつた。それで此の御子を木俣神とも又御井神とも申し上げて、井戸を守り給う神である。

十　八千矛命

大國主命は、亦の御名を八千矛命と申し奉る。

こゝに、高志の國に沼河比賣と云ふ世にも美しい女神があつたが、命は是れに娶ひし給はんとして、都を御立ちになり、徽びやかに比賣の家の戸の前に御立ちになり、御歌をもつて御心を述べられた。

八千矛の神の命は、
八島國妻求ぎかねて
遠とほし高志の國に、
賢し女を在りと聞かして、
麗し女を在りと聞こして、

さよばに在り立たし、
よばひに在り通はせし、
大刀が緒もいまだ解かずて、
覆衣をもいまだ解かねば、
乙女の鳴すや板戸を
押そぶらひ吾が立たせれば
引こづらひ吾が立たせれば
青山に鵺は鳴き、
狭野津鳥雉は動よむ、
庭津鳥鶏は鳴く、
愁たくも鳴くなる鳥か、
この鳥もうち悩めこせね、

いしたふや天馳使者、
ことの語りごとも此をば』

此の歌は、

『自分は日本國中に妻を求めかねて、遠い遠い高志の國に怜悧なそして麗しい少女があると聞いて矢の如き心を押へ兼ねて、其の女と結婚しやうと思ひ遙々此處まで尋ねて來た。太刀の緒もまだ解かず、被衣もまだ解かぬ間に、少女のあなたが音をさせて鎖した板戸をどうして開けやうかと、押したり引いたりして、立つて居れば其の中に青山には鵺が鳴き、野邊には雉子が鳴き、庭には鶏が鳴き立てる。あゝ嘆かはしくも鳴く此の鳥どもよ。せめては此の鳥共を打ち悩して心を慰やしたい。さるにしても遠い遠い高志の國まで天を馳せるやうに夢中になつて急いで來たものを、まあ、此の妻探しのことは後の世迄も故事と

して語り傳はるであらう』

と云つて、切なる御心を訴へられた。

沼河比賣は、其の夜は御逢ひになり難い事があつたらうか、まだ戸を開けず、戸の内から御かへし歌をうたひなされた。

八千矛の神の命
軟草の女にあれば
妾心浦渚の鳥ぞ、
今こそは千鳥にあらめ、
後はなどりにあらむを、
生命はな死せ給ひそ、
いしたふや天馳使者、
ことの語りごとも此をば』

青山に日が隱らば、
ぬば玉の夜は出でなむ、
朝日の笑み榮え來て、
栲綱の白きたゝむき、
沫雪の弱やる胸を、
そたゞき叩きまなぐり、
眞玉手たまでさし纏き、
股長にいはなさむを、
あやにな戀ひきこし、
八千矛の神の命は、
ことの語りごともこをば』

此の歌は、

『八千矛の神の命よ、妾は軟草の如く、なよやかな女の身でありますれば、思ふまゝになりませぬ。丁度、浦の洲崎に立ち騒ぐ、鳥のやうで、心の中は今は千鳥のやうに騒いで居りますが、後には、波の上に浮ぶ平和なる鳥のやうに安らかに御逢ひ申しませう。それ故に、今は慨いて決して死になどしなさるな。暫らく御待ち下さりませ』

彼の西の青山に明日の日が入つて、夜になれば、妾は必ず出て参ります。其の時は、朝日のはなやかに、笑み榮えるが如く、あなたの白い腕をもつて、淋雪のやうな妾の若い胸を、そうつと抱き合つて、ゆる〳〵と御休みになることも出來ますから、今は切に逢ひたいとは、思し召し給ふな、わが戀しき八千矛の神よ』

かく、御答へになつて、其の夜は御逢ひにならず、翌くる日の夜に、御逢ひ遊ばした。

高志の國は、今の越前の國であると云ふ。大國主命は、其の後、折々、沼河比賣命の許に御通ひになるので、須勢理比賣命は、ひどく妬み給ふた。

ある時、大國主命は、出雲の國から大和の國へ御出でにならうとして、旅の支度を整へ、御片手は馬の鞍にかけ、御片足は其の御鐙に踏み入れて、歌をうたひ給うた。

ぬば玉の黑き御衣服を、
まつぶさに取り裝ひ、
奥津鳥胸見るとき
鰭たぎも此は適はず
邊津波磯に脱ぎ棄て
鴟鳥の青き御衣服を
まつぶさに取り裝ひ、

奥津鳥胸みる時
はたゝぎも此もふさはず
山縣に求ぎし
あたねづき染木が汁に染衣を
まつぶさに取りよそひ
奥津鳥胸みる時
はたゝぎも此し宜ろし
いとこやの妹のみこと
群鳥の吾が群れ去らば
引け鳥の吾が引け往なば、
泣かじと汝は云ふとも
山處の一本すゝき

うなかぶし汝が泣かさまく
朝雨の狹霧起たむぞ
若草の妻のみこと
ことの語りごとも此をば。』

此の歌は、

『まつ黒な衣服を着飾つて、鳥の如く兩手を張り上げて自分の服裝を見て、これは似合はぬわい、と磯邊に脱ぎ棄て、今度は翡翠の羽の色のやうな、青い衣服を着飾つて兩手を張り上げ似合うか似合はぬか、自分の態を見て、あゝこれも似合はぬわい、と磯邊に脱ぎ棄て、今度は山々に探し求めた茜草を、臼で舂いて絞り出した汁で赤く染めた衣服を着飾り兩手を張り上げて似合ふか似合はぬかを見あゝ見れが能く似合ふ今はこれで出發しやう。それでは愛しいわが妻よ、群鳥の飛び去る如く、

わたしが行つてしまへば、泣かないとおん身は云ふが、山の崖などに一本生へて居る、薄のやうに、きつと首を垂れて、朝雨の霧と降るやうに、泣きむせぶだらうね』

其の時、御后の須勢理比賣命は、御盃を持ち給ひ、御馬の傍に御立り寄りなされ、大國主命に捧げ給ひて歌を御うたひになつた。

八千矛の神の命や
吾が大國主こそは男に座せば、
打ち見る島の埼々
搔き見る磯の崎遺ちず
若草の妻持たせらめ
妾はよも女にしあれば、
汝除きて夫はなし

汝をきてつまはし
綾垣のふはやがしたに、
むしぶすまにこやがしたに、
淤雪のわかやる胸を
栲綱の白きたゝむき
そたゝき叩きまながり
眞玉手たまでさし纏き
股長に寐をしなせ、
豐御酒たてまつらせ、
八千矛の神のみこと、
ことの語りごとも此をば』

此の歌は、

『大國の主とまします、妾が夫こそは、男であらせられまするれば、何處へ御出でになつても、若く美しい妻を御持ちになりませう。而し妾は女であれば、あなたの外には夫がありませぬから、綾の帷帳のふわ〳〵したる閨の中に絹の衾を敷いて、樂しく平和に暮したいと存じます。どうか倭の國へ御上りなさることは、思ひ止つて下さい。そして何卒かう打ちとけて此の御酒を召し上つて下さい。妾のいとしい八千矛の命よ』

と云ふ親しみの深い、優しい歌である。

此く歌ひ終つて、御夫婦睦しく御盃を交はし給ひて、後の世までも永く出雲國に御鎮りになられた。

此の四首の御贈答の御歌は、『神語』と云つて、後の長歌のはじめである。

大國主命は又、胸形の奥津宮に御出でになられた、多紀理比賣命に御遇ひになつて、阿遲鋤高日子根神、次に女神、高比賣命の二柱の神を御生みになつた。阿遲鋤高日子根神は、今、賀茂之御祖大御神と申し、高比賣命は亦の御名を下照比賣命と申し上げる。

命は又、神屋楯比賣命に御娶ひまして、事代主神を御生みになつた。

大國主命には、數多くの御子が御生れになつたが、其の中で十五柱の神を珍の御子として、殊に御寵愛なされ、國の中の各地に置いて、諸共に天下を御治めになつたから、四方の國の人々は皆其の恩惡を受けた。

十一　少彦名命

大國主命は、多くの御子の神等と共に、天の下を治めなされ、供を連れて、出雲國の御穗の崎に御出でなり、御食事をし給はんとした時に、海の上

に人の物言ふやうな聲が聞えたから驚いて御覽なされたけれども、何物も見えなかつた。

しばらくあつてから、非常に小さい神が、天之羅摩船に乘り鵝の皮を全剝に剝いだのを衣服とし、また鷦鷯の羽を衣服に着て、波の間から出で來て、潮のまに〳〵流れて、岸に寄り着いた。

大國主命は珍しく思し召して、其の神を取つて掌の中に入れて御覽なされて居ると、其の神は跳り上つて、御顏に飛びつき御頰に齧みつきなされた。

いよ〳〵と怪しいと思し召して、其の名を問ひなされたが、如何しても答へない。また御供の神達に問ふても、皆知らないと答へ奉る。

其の時蟾蜍が出て來て、

『これは必ず久延毘古が知つて居るでせう』

と申し上げた。

そこで、久延毘古を召して御問ひになると

『此の神は神產靈神の御子の、少彥名命と申し奉る神であります』

と答へ奉つた。

命は此の由を高天原に御出でになる、神產靈神に申し上げると、

『これは眞に自分の子である。汝、葦原醜男命、其の神を惠み育てゝ共に、兄弟となり、葦原の中國を作り固めよ』

と、御敎へになつた。

大國主命は神產靈神の敎へ諭しのまに〳〵少彥名命と御兄弟となつて、心を一つにし、力を戮せて、天の下を殘る隅なく廻り、葦薦菅を殖え給ひて、海月の如く浮き漂へる國を作り固めて、豐葦原の國に造りなし給ひ、また稻種を持ち巡りて殖え給ひて、瑞穗の國に作りなされた。

ある時、大國主命は御病氣にかゝりなされたので、少彦名命は、命を療さうとして豐後の國大分の速見の湯を下桶より持ち引き給ひて、休浴させ給うたが、しばらく經つて、大國主命は、

『あゝ、私は長く寢てしまつた』

と仰せられて、忽ちもとの御體になり力足を踏んで起き上りなされた。其の跡は今でも湯の中の右の上に殘つて居る。伊豫國溫泉郡にある溫泉はこれである。かくて、天下の人民の爲めに二柱の神は御相談になつて、藥溫湯の術を御始めなされた。

また人民や畜産の爲めに、其の疾病を治すべき法を定め給ひ、また鳥獸の災害昆蟲の害を除く、禁厭の法をも御定めになつた。此の故に、大國主命、少彦名命の二柱の神を、今に至つても猶ほ、醫藥の神として祀つて居る。

少彦名命はまた、酒を造り始めなされた。それ故に亦の御名を久斯神とも申し上げる。久斯とは酒の古名である。

斯く、二柱の神等は力を戮せて國を作り固めなされたが、大國主命は尙ほ御滿足遊されず、ある時少彦名命に向つて、

『吾等が作つた國はどうもまだ善く作つたとは云はれない』

と申しますと。

『いや善く作られた處もあるし、まだ作られないところもある』

と御答へなされた。

少彦名命は後に伯耆國に御出でになり、粟島に粟を蒔いて、其の實がよく實つた時に、其の莖に上り彈かれて、常世國へ御渡りなされ、遠く海外諸國を御經營になつた。

程經て後、常陸國大洗の磯に現れて、永く其處に御鎭りになられた。又

少彦名命の御名を顯はした久延毘は、山田之曾騰と云ふ者で、足は歩かぬが、天の下の事を知れる神である。

十二　幸御魂奇御魂

今まで御力を戮せて、國土を經營し給へる少彦名命は、遠く外國に御渡りになられたので、大國主命は非常に御力を落しなされて、

『此の後私一人でどうして此の國を治むることが出來やう。また今から後は何の神と共に、此の國を作り固めやう』

と御嘆きになつてゐられた時に、忽然として怪しい光りが、海上を照したので、大國主命は、怪しんで見てゐられると、白裝束をして、手には天之瓊矛を持つた一人の神がだん〳〵近寄つて來た。そして、大國主命に云ふには、

『もし能く、吾を祀らば諸共に國を造るであらう。しかし吾を祀りなければ、此の國はなか〳〵出來上らない』

と申した。

大國主命はこれを聞かれて、

『斯く敎へ給ふ神は、何れの神でゐらせられまするか』

と問ひ給へば、

『われは汝が幸御魂、奇御魂である』

と敎へ給うた。

『然らば、何處に御祀り申せば宜しう御座りまするか』

と御聞き申すと、

『大和の靑垣山の東山の上に宮殿を建てゝ齋き祀れよ』

とお敎へになつた。

乃で、御敎への通り、大和の國の青垣山の上に宮柱太く立て物室を造つて御祀りになつた。これによつて其のところを御室山と云ひ、其の神をば、大三輪之大物主神を申し上げる。

大國主神は、御自分の、幸御魂、奇御魂の神を祀り給ひ、共に御力を戮せて、矛を御杖として天下の荒ぶる惡しき神を、悉く御追討遊ばされ、此の國を能く作り竟へ奉つたから、御名を八千矛神とも申し上げるのである。

十三　雉之頓使

こゝに、高天原に座します、天照大御神は、此の豐葦原の國を御子天之忍穗耳命に治めしめんと思し召され、

『豐葦原之千秋之五百秋之瑞穗國は、わが子正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命の治むべきで國である』

と仰せられて、御子忍穗耳命をば、此の國の大君として御降しになつた。

忍穗耳命は、仰せを畏みて高天原から地の上に長く懸かれる、天の浮橋の上に降り立ち、遙かに見下し給うに葦原の中國は思ひの外に亂れて多くの惡しき神共は、野にも山にも滿ち溢れてゐたので、此の有樣では

なか〳〵治め難いと思し召され、また、高天原に還り上られて、其の狀を大御神に申し上げた。

そこで、高天原にては、高產靈命、天照大御神の仰せを以つて、八百萬の神たちを、天之安河原に召し集め、親しく御相談なされた。

『さきに、此の葦原の中國は、わが御子の治むべき國である、と仰せられて、天之忍穗命を天降し給うたが、忍穗耳命は、天の浮橋に降り立て見給へば、葦原の中國は、今亂れに亂れて多くの惡しき神共が、到る處に起り磐も木も、草の葉まで物言ふ如く立ち騷いで、甚だ惡しき國であるから、

忍穗耳命は復還つて來れた。それで先づ、何の神を遣はして惡しき神共を平げたらよからう』

と、八百萬神だちの御意見をきかれた。

こゝに、深謀ある思兼神は、他の神々と御相談になり、さて謹んで答へるやう、

『葦原之中國の惡しき神を平げるには智勇傑れたる天之穗日命は最も適任と思ひまする』

と申し上げたので、大御神は天之穗日命を御召しになり、其の旨を申し付け、御降しになられた。

然るに天之穗日命は其の重大なる任務も忘れ、高天原にて多くの神々が、ひたすらに御待ちなされて居るのも思はず、葦原之中國の主たる、大國主命の威勢に恐れて、出雲朝廷の一武官として仕へ、三年になる迄、高

天原に御還りなさらなかつた。

こゝに於いて、高天原にては、大御神の仰せを以つて、八百萬の神々は、天之安河原に御集りになり、會議を御開きになつたが、此の度も思兼神の發議によつて、天津國玉神の子、天若日子を御遣はしになることになつた。

畏くも、大御神は、天若日子に天鹿兒弓天羽々矢と云ふ、世にも稀れなる精巧の弓矢を御授けになり、中國に御降しなされた。

然るに、此の天若日子も、大國主命の御子、下照比賣を妻として、ゆく〳〵は其の國を獲やうと思ひ、八年過ぎても復命しなかつた。

高天原にては、三度會議を御開きになり、天若子が斯く久しく止つて、復命せぬ所由を問はしむることゝなり、思兼神の謀りにて、名鳴女と云ふ雉を御遣はしになつた。

名鳴女は此の大任を承け奉りて、羽音も高く雲をかけり、山河を越えて中國の出雲へ降り、天若日子の舘を探し、求め、門の前の楓の木に止つて、

『天照大御神の仰せのまに〳〵、われの申すことを聞けよ。汝、天若日子、天神の汝を此の葦原中國に遣はしたるは、此の國の荒振神を平げしめん爲めなるぞ。しかるに何故に八年になるまで、復命をせざるか』

と、聲も嚴かに問うた。

天若日子が天降りする時に從つて來たものに天之探女と云ふものがあつたが、此の雉の云ふ事を聞きて、

『何處から來たか此の鳥の啼く聲が、氣味が惡う御座ゐますから、早く射殺しておしまいなされ』

と云つた。

もとより思慮足らぬ天若日子は、召し使ふ天之探女の云ふことを聞き、

大御神より賜はつた、彼の弓に矢を番へて、どう〳〵其の雉を射殺してしまつた。

しかるに其の矢は、雉の胸を貫き通りて風に唸り雲に響いて、遠く高天原なる大神等の御前に落ちた。

高產靈神は怪んで、其の矢を御手に取つて御覽なされると、羽は染血に染つてゐた。そこで諸々の神等に見せ給ひ、

『此の矢は天若日子が天降りたる時に、大御神の授け給ひし矢であるが、如何してこゝに飛ひ來たのであらう。此の羽に血のついてゐるのを見れば、天若日子が惡しき神と鬪つて血がついて居るかも知れない』

と仰せられ、

『もし天若日子が、惡しき神と戰ひて飛び來し矢なれば天若日子に中らざれ。また邪惡き心あらば此の矢に中りて死ね』

と呪ひ給ひて其の矢を衝返しなされた。すると其の矢は再び雲の間を勢するどく馳け通りて、天若日子が安らかに寢たる胸のたゞ中を貫いたので、天若日子は其のまゝ死んでしまつた。

天若日子の妻なる下照比賣は此の有樣を見て泣き悲しみ給うたが、其の泣聲は風に吹き送られて高天原まで聞えた。

こゝに、天若日子の父、天津國玉神と其の妻子等は、其の聲を聞いて降り來て、泣き悲み、其處に喪屋を作つて、多くの鳥を集め來て祀り、八日七夜を泣き明かした。

此の時、味鋤高彦根命は、天若日子が死んだと云ふことを聞いて、急いで其の葬の席に來り、喪を吊ひ給う時に、命の姿形は、天若日子に生きうつしと云ふ程似てゐたので、天若日子の父や妻は、

『わが子はまだ死なないでゐた』

『妾の夫はまだ死なずにをられた』

と左樣から取りすがつたので、高彦根命はり怒給ひ、

『わたしは親しい友の若日子が死んだのを吊ひに來たのだ。それを穢はしき死人に比ぶるとは何事だ』

と云つて、腰なる十握劍を拔き放ち、其の喪屋を切り伏せ、足を以つて蹴放ちなされた。

高彦根命は御怒りなつて飛び去り給う時に、御容貌すぐれて麗しい神であつたから、岳や谷を照し給う程であつた。そこで、御妹の下照比賣は兄命の御名を顯さうと思ひ歌を御うたひになつた。

『天なるや弟棚機の
うながせる玉の御統みすまるに
あな玉はや眞谷二わたらす

味鍬高彦根神ぞや』

此の歌の意は、

『天上の若く美しい機織姫が、頸にかけて居る玉飾りの、其の玉の麗しく光つて居るやうに、谷を二つも越えて輝いて見ゆる、此の美しい神は、味鍬高彦根神である』

此の歌は後世、雅樂寮で定めた夷振と云ふ歌である。また、若日子の喪屋は後に山となつて、今の美濃國の藍見河の河上にある喪山はこれである。

十四　鹿島大神

茲に、天照大御神は、八百萬神だちを天之安河原に集め給ひ、豐葦原之中國の惡しき神を征伐せしむるには、何れの神を遣はすべきか、と御相談

になつた。

此の時に、思慮深き思兼神は、諸々の神だちと議つて、

『天之安河の河上の天之石矢に坐す伊都之尾羽張神を御遣はしなされませ。もし、亦、此の神でなければ其の神の御子の、建御電之男神を御遣はしになればよろしう御座ゐます。其の尾羽張神は、天之安河の河水を逆まに塞き上げて道を塞いで居らるゝから、他の神は行くことは出來ますまい。天迦久神を使として、其の尾羽張神に御問ひなされゝば宜しう御座ゐまする』

と申し上げた。

そこで天之迦久神を御遣はしになつて、尾羽張神に、大御神の御仰を傳へると、

『それ程までに此の尾羽張を申され給うなれば謹んで、御仕へ申しま

せう。けれども此の事は私よりも私の子の健御雷神の方が宜からうと思ひまするから、それを御遣はしなさるやう御願ひ申しまする』と仰せられて、御子の健御雷命を献つた。

健御雷命は彼の迦具土神の後裔であつて、武勇絶倫、當時高天原で其の其右に出づる神がない、程勝れて豪かつた。

大御神は、健御雷命に、經津主命を副使とし天之鳥船命を添へて葦原の中國へ御遣はしになつた。

二柱の猛き神は、天之鳥船命を隨へて、出雲國の伊佐々の小濱に到り給ひ、大國主命を召し給ひ、十握劔を浪の上に逆に立て其の上に安坐をかいて、大國主命に問ひ給ふには、

『天照大御神高天原に坐まして、此の豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗國は、わが御子正哉吾勝勝速日天之忍穗耳命の治むべき國なりと仰せ

られて、先づわれ〳〵を御降しになつて此の國を平定せしめらる。汝が治むる此の葦原の中國を天神の御子に捧げ給ふや、如何に』

と御問ひになつた。すると大國主命謹んで御答へするには、

『私はよう御答へ申しませぬ。先づ私の子の事代主命に御問ひ下さいけれども事代命は今、三穗崎に行つて獵をして居てまだ歸つては來ませぬ』

と御答になつたので、健御雷命は天之鳥船命を遣はして、八重事代主神を御召しになり、天照大御神の仰せのまに〳〵言ひ傳へ、

『汝の心は如何に』

と御問ひなさると、事代主命は非常に恐懼して、御父の大國主命に向はせ給ひ

『天照大御神の御仰せは誠に畏しい極みでありまする。わが父の神

には宜しく避け奉りて此の國を天神の御子に献りなさい』
と申し上げて、乘つて來られた船を踏み傾けて、天の逆手を打つて、海の中に青柴垣を御作りになり其の中に御隱れになられた。
健御雷神はまた大國主命に問ひ給ふには、
『汝が子の八重事代主命は今、斯く申して避け隱れてしまつた。なほ此の他に問ひ合はすべき神があるか』
と仰せられた。大國主命は、
『また、わたしの子に健御名方命と云ふのがあります。この子の他にはありませぬ。』
と御答になつた。
大國主命が斯く御答になつてゐられる時に健御名方命は千引の大岩を輕々と引き提げて、健御雷命の前に立ち給ひ聲を荒げて、

『誰だ。わが國へ來てこそ〳〵と物を云ふのは。先づわれと力競べをしやう』
と云つた。
『よし、力競べしやう』
健御雷神は斯う御答になつて、其の御手を前へ突き出された。
健御名方命は、健御雷命のさし出し給へる御手を取らうとすると、宛も氷の如く劔の刃の如くなつてとても捕へられそうもないので、さすがの健御名方命も恐れて二三歩後へ退いてゐられた。
今度は、健御雷命が進んで健御名方命の手を取ると、若葦の如くもろくも摑み批がれてしまつた。かく摑み批いで置いて力を籠めて投げ出したので、健御名方命は恐れて逃げ出した。
健御雷命はこれを追うて、信濃國の諏訪の湖に追ひ詰め、殺さうとする

と、健御名方命は
『何卒か私を殺し給うな。私は永く此處から他へ行きませぬ。また、吾が父の命の仰せも、兄なる事代主命の云ふことにも決して背きませぬ。そして此の葦原の中國は天孫大御神の仰せのまに〳〵永く天神の御子に捧げまする』
と申したので、健御雷命はじめて御許しになつた。
健御雷命は更らに亦、出雲國へ御歸りになつて、大國主命に向ひ給ひ、
『汝の子事代主命と健御名方命は、天神の仰せに背かぬと申した。汝が心は如何ぢや』
と問ひ給ひしに、
『吾が子等二柱の申した通り私も仰せに背きませぬ。此の葦原の中國は永く天神の御子に捧げませう。たゞ私の住む宮殿をば天神の御

子の宮殿のやうに底津岩根に宮柱を太く立て、千木を空高く置いて建築へて下されば、私は此の世を遠く去つて幽界に隱れて住みまする。亦私の子の多くは、事代主命が悉く率ゐて天神の御子に仕へ奉る上は、決して背く者はありませぬ。』
大國主命は、また此の國を平げなされた時、杖につき給ひし矛を健御雷命に授けて、
『私はこの矛を以つて此の國を治めて功績を立てました。今これを献りますから、天神の御子は此の矛を持つて國を御治めになれば必ず安らかに治まるでせう』
と敎へて隱れ給うた。
そこで、健御雷命は大國主命の申した通り、出雲國の多藝志の小濱に大宮地を定め給ひ、多くの神等を集めて柱は太く、床は廣く、立派な宮殿を

造りいろ〳〵な御馳走をこしらへ、高皇產靈命の仰せに依つて、天之穗日命は大國主命の御前に御仕へになつた。

大國主命の御鎭りになつた宮殿は、今の出雲杵築の大社である。また天之穗日之命の御裔は出雲國の國造として、今に至るまで杵築の大社に仕へ奉りて居る。

健物雷命は經津主命と共に天下を廻つて荒ぶる惡しき神を悉く拂ひ平げて高天原に還り上り給ひ、大御神に其の狀を復命申し上げた。

後に、健御雷命は常陸の鹿島の鄕に御鎭りになられたから、鹿島大神とも申し上げる。また經津主命は、常陸の香取に御鎭りになつたから、香取大神と申し上げて、何れも後の世に武神として崇らるゝ神である。

十五　天孫降臨

健御雷命經津主命の二柱の神の功績によりて、豐葦原の中國は悉く平和に歸したので、高天原にては、天照大御其の御子の天之忍穗耳命を召し給ひて、

『今葦原の中國はすでに平和になつてしまつた。おん身は是れより天降りして其の國を治め給へよ』

と仰せられた。

忍穗耳命は其の時申し給うには、

『私は天降りしやうとして支度をして居る中に子を生みました。名は天邇岐志國邇岐志天津日高彥火能邇々藝命と申します。此の子を私に代へて天降し致させたいと思ひまする』

と御願ひ申さたので、大御神は御許しになつて、いよ〳〵邇々藝命を御降しになることになつた。

邇々藝命は御父天之忍穗耳命の高皇産靈命の御女、萬幡豐秋津比賣命に御遇ひになつて生み給へる御子で、天照大御神には御孫に當らせらるゝのである。

されば、天照大御神、高産皇靈命は此の御子を殊に御寵愛なされて、日嗣の皇子に御定めになられたのである。

天照大御神は、日嗣の皇子なる邇々藝命を、天津高御座に請じ奉りて、

『此の豐葦原の千秋の長五百秋の瑞穗國は、おん身の治め給ふべき國である。されば敎へ諭しのまに〳〵天降りし給ふべし』

と仰せられて、天之兒屋根命、天之太玉命、天之宇受賣命、石凝姥命、玉祖命と併せて五部族の長を副へ、また大御神の彼の天の岩屋に隱れ坐せし時御用ゐになりし八咫の鏡、八尺勾瓊に天叢雲劔を賜ひて永く天津日嗣の御璽となさしめ給ひ、思兼神、手力男神、天之石門別神をも副ひて降し給うた。

かく、天津日高彦火々邇々藝命に、諸々の神だちを副へて天降し奉らんとし給ふ時に、天照大御神御親ら御手に御神寶の鏡と劔とを捧げ持ち給ひ仰せ給ふやう。

『大八島豐葦原の瑞穗國は、吾が御子の繼々王として治め給うべき國である。わが鐘受の皇子なる邇々藝命は、其の國に天降りし給はゞ、此の天津高御座に坐して、安國と平げく治め給ひ、また、天津日嗣の瑞穗を天津御膳の長御膳の遠御膳と萬千秋の長五百秋に安らけく齋座にきこし召し給へ。また此の鏡は專らわが御魂と思ひて、吾が前に仕へるが如く殿を同じくし、床を一つにして齋ひ祀れよ。寶祚の隆ゆることは天地と共に永久に限りなく窮りないであらう。』

と御敎へなされて、鏡と劍とを御授けになつた。

また、高亦產靈命は

『われは高天原に天津磐境を造り、天津神籬を起し樹てゝ皇御孫命の御運を齋ひ奉るであらう。汝天之兒屋根命、天之太玉命の二柱の神は、天津神籬を持ちて葦原の中國に降りてまた皇御孫命の御爲めに齋ひ奉れよ』

と敎へ給ひ、更に太玉命に敎へ給ふやうは、

『汝天之太玉命は諸々の部族の神を率ゐて、高天原の儀式の如く仕へ奉り、各々其の職を守りて仕へ奉るやうにせよ』

と仰せられて、諸々の神々を副へ隨はしめて天降し給うた。

こゝに、天孫邇々藝命は、天の磐座放ち、天の八重雲を嚴の千別きに千別きて天降りし給う時に、御先拂ひの神立ちかへつて申すには、

『天の八衢に怪しい神が居りまする。其の神は、上は高天原を照し、下

は葦原の中國を照して、いと恐しい神でありまする』

と申し上げた。

そこで天照大御神は、天之宇受賣命を召して、

『汝はか弱き女の神であるが、敵に逢うて怖れず、また負けぬ神であるから、其處に往いて、今皇孫命の天降りし給はんとする時に、如何なる神なれば斯く道に居るや、と問はれよ』

と御仰せになつた。

宇受賣命は其處に往いて其の神に向ひ、大御神の仰せを申し傳へしに、其の神は答へて申すには、

『私は此の國の神なる猿田彦と申すもので御座ゐます。また斯く出で居るわけは、天神の御子の天降りし給うと云ふことを聞いて、御迎へに參つたのでありまする』

と答へた。

宇受賣命は重て、

『しからば皇孫命は何れへ御降りになればよろしいか、また汝は何處へ往かうとするか』

と問ひ給へば、猿田彦答へて、

『天神の御子は筑紫の日向の高千穗樓觸峰に御降りなされば宜しう御座ゐます。また私は伊勢の狹長田五十鈴の河上に往きます。私を見顯はしたのは、おん身であるから後で私を御送り下さい』

と申した。

天之宇受賣命は還つて此の由を天照大御神に申し上げ奉つた。

かくて邇々藝命は、猿田彦命の御先導にて、天忍日命天津久米命の二柱の神は天之石靫を負ひ、頭推之大刀を佩き、天之波士弓を取り持ち、天之

眞鹿兒矢を手挾んで御前に立ち、天之村雲命は玉串を取り、天之忍雲根命は天津諄辭を讀んで、天之浮橋の上に整列し給へ、隊伍を整へて、天之八雲を排し分けて、筑紫の日向高千穗の樓觸峰に天降し給うた。

それから薩摩國の阿多郡笠沙之御前を通らせ給ひ、

『此の地は朝には朝日が射し、夕には夕日が照つて、晴れ晴れしたる土地である。先づ此の地に宮殿を建てやう』

と仰せられて、底津磐根に大宮柱太く建て、空高く千木を構へて廣々とした宮殿を御造りになつて豐葦原の中國を御治めなされた。

かくて、邇々藝命は、天之宇受賣命に仰せ給うには、

『かの猿田彦命は汝が顯したる神であるから、これより伊勢の國まで送り届けよ。また其の神の名は汝が負うて永く仕へ奉れ』

と御仰せになつた。

そこで、天之宇受賣命は、猿田彦命を伊勢の五十鈴の川上まで送つて行つた。そして還る途中、志摩の海の魚類を悉く集めて、

『汝等は天神の御子に仕へ奉るか』

と問ふた時に、諸々の魚が皆、

『謹んで御仕へ申し上げまする』

と答へたが、海鼠ばかりは何んとも云はないので、宇受賣命は、

『此の口は答をせぬ口だ』

と云つて、小刀を持つて其の口を割つてしまつた。それで今に至るまで海鼠の口が割けて居るのである。

天之宇受賣命は、猿田彦命を見顯はし、伊勢の國まで送つて往かれたので、其の名を負ひ持つて、後の世まで猿女君と云つて仕へ奉つた。

十六　人命夭折

邇々藝命は、笠沙の御前に宮居して、豐葦原の中國を御治めになつて居られたが、ある春の日、あまりの麗かさに宮殿を立ち出で、海邊近く幸きして、晴れたる海の上を、心ゆくばかり眺めて居られた。

すると、道の傍に花を摘みながらたゞ一人、餘念なく遊んで居た美しい少女があつた。

若き邇々藝命は、此のうるはしい姿をながめて、胸の躍るを覺えつゝ、傍近く進み寄り給ひ、

『おん身は何處の者か』

と、問ひ給へば、少女は

『妾は大山津見神の女、名は木の花咲耶姫と申しまする』

と答へた。命は

『おん身に同胞があるか』

と重ねて問ひ給へば、

『姉が一人あります。名は石長姫と申します。』

と答へた。

命は、此の咲く花の如く麗はしい少女と永く御棲居したい、と思し召されて、

『朕はおん身を妃にしたいと思ふが、おん身は如何思ふか』

と御心の中を申されると、少女は恥かしげに、

『妾は能う申し上げかねまする。天神の御子もしそう思し召さるゝなら、妾の父大山津見神に御問ひなされて下されませ』

と答へた。

そこで、御使を遣はし給ひ、大山津見神に問はれると、大山津見神は家の譽と大いに喜んで、姉の石長姫を副へて數々の品物を持たせて、遥々藝命の御前に獻つた。

然るに其の姉の石長姫は、容貌が醜かつたので、木の花咲耶姫のみたゞ一夜御召しになり、石長姫をば送り返へしてしまはれた。

こゝに、大山津見神は、姉の石長姫を送り返へされたので、非常に恥ぢて、

『私の娘二人並べて獻つた所由は、姉の石長姫を御召しになれば天神の御子の御壽命は、雨降り風吹けども永久に石の如く常磐に堅石に坐はするやう、又、木の花咲耶姫を召し給はゞ、木の花の榮ゆる如く榮えまさんやうにと、祈つて獻つたのであります。しかるに今、石長姫を醜いとて送り返へさせられ、木の花咲耶姫のみ御召になられたから、天神の御子の御命は木の花の散るが如くもろくのみましますでせう』

と申し上げた。この故に、世の人の壽命はだん〳〵に短くなつたのだと云ふことである。

さて、木の花咲耶姫はたゞ一夜の御契りにて邇々藝命の御許を去りなされたが、やがて宮ならぬ身となつたので、命の御前に出で、

『妾は天神の御子を孕んで今生むべき時になりました。けれども天神の御子をひそかに產むのは恐多いことでありますから、此のことを申し上げやうと思つて參つたのでありまする』

と申した。

すると邇々藝命は嘲笑ひ給ひて、

『是は朕が子ではあるまい。必ず國神の子であらう』

と仰せられたので、咲耶姫は深く恨んで、

『妾が姙んだ子はもし國神の子であるなら、生む時幸がないであらう。また天神の御子であれば、生む時は必ず天祐があるでせう』

と誓つて、戸のない室を作つて其の内に入り、土を以つて其の室を塗り塞いで、子を產む時に其の室に火を放けた。

火の盛んに燃えて居る時に御生れになつた御子は、火照命と申し、次に火の少しく衰へた時に御生れになつた御子は火遠理命と申します。此の二柱の御子は、火に少しも燒かれずに御生れになつた。火遠理命は亦の御名を天津日高日子穗々出見命と申し上げる。

木の花咲耶姫命は、其の火燼の中から御出ましになつて、

『妾が生んだ子もまた妾も火の中に在つても少しも怪我を致しませんでした。これをもつて妾の詞の僞りでないことを御悟り下さりませ』

と申し上げた。すると命は、

『いや朕は始めから朕が子だと云ふことを知つて居るが、たゞ一夜で姙んだのだから、他の國神をして朕が子であることを信ぜしむるために、心にもないことを云つたのだ。今、おん身も二柱の皇子も不思議の靈德があつて、火に燒けないから、國神は皆、朕が子であることを信ずるだらう』

と仰せられた。

けれども、木の花咲耶姫命は其の後も、邇々藝命を恨んで共に御詞も御交はしにならなかつた。命はこれを御心配なされて御歌をよみなされた。

『奥津藻菜邊にはよれども眞寐ごとも
あたはぬかよも濱つ千鳥よ』

此の歌は、

『沖に漂ふ藻草は浪にゆられて岸に寄つて來るが、濱の千鳥はそれでも藻草といつしよにならないやうに、おん身は朕と物をも云ふて呉れない』

と云ふ御恨みのおん歌である。

其の後、邇々藝命は年久しく御位に御出でなつてゐられたが、とう〳〵高千穗宮に御崩れになつたので、薩摩國高城郡水引鄕に御陵を作つて御祀り申し上げた。

十七　海幸山幸

邇々藝命の皇子に、火照命、火遠理命と申す二柱の御子があつた。兄君の火照命は、漁業に長じ給ひ、弟君の火遠理命は山狩りを御好みなされた。そして毎日のやうに、海と山とに御出でになつてゐられたの

で世の人は、兄命を海幸彦、弟命を山幸彦と申してゐた。

ある日兄命は火遠理命に向はせ給ひ、

『かうして毎日、おん身は山へ狩りに行き、私は海へ行つて釣りをして居たのでは、あまり面白くないから、今日はおん身の獵具と、私の釣道具と交換へて、おん身は海へ、私は山へ行つて見やうではないか』

と仰せられたので、火遠理命は、

『それは面白いことで御座いませう』

と、二柱の神は、得物を取り替へて其の日海と山とに分れて日が暮るゝまで居られたが、どちらも馴れさせ給はぬ事なので兄命は獸の跟跡をも見給はず、弟命は魚を得ないばかりでなく其の釣鉤を海に失くしていくら探し求めても、如何しても見當らず、ずご〳〵と御歸りになられた。

二柱の神は宮殿に御還へりになつて、各々得物を御返へしなさることになつたが、火遠理命は兄命に

『兄君よ、私は兄君の釣鉤をとう〳〵海に失くしてしまひました。どうか御許し下さりませ』

と御願ひ申したが、兄命はなか〳〵御許しにならなかつた。

そこで、火遠理命は、御自分の劔をもつて數多くの釣鉤を御造りになり、一つの箕に盛つてお償ひなされたが、兄命は、

『いや元の鉤でなければ受け取らぬ』

と申して如何しても御聽許れなさらない。

弟命は致し方なく、

『それではもう一度海邊へ出て探して見まするから、何卒ぞ暫らく御待ち下さりませ』

とても探し求むることは出來ぬことゝ思し召しながら、あまりに兄命が請ひはたるので、先きの海邊を一人さまよひつゝ嘆いて居られると、一羽の川雁が罠にかゝつて困んで居たので、もとより情け深い命は憐れに思し召して其れを放してやられた。

すると其處に忽然と顯れた一人の神樣があつた。白い鬚が長く垂れて見るから神々しい。

火遠理命の御嘆きなさるのを見て、

『天神の御子は何故そう御嘆きなさるのですか』

と問ふた。

命は釣鉤を探し求めて居ることを答へなさると、

『いやそれは甚と容易いことであります。私は命のために善いやうに取り議らひまするから決して御心配遊ばしますな』

と云つて持つて居た袋の中から一つの黑い櫛を出して、それを地に投げると不思議にも竹林が出來た。其の竹林の竹を取つて無間勝間之小船と云ふ、水の入る隙のない小船を造つて、其の船に命を載せ奉り、

『私は此の船を押し流しますから、暫らくの間御乘りになつてゐると、きれいな路があります、其處で船を御下りになつて御進みなると、魚鱗のやうに造つた宮殿があります。其の宮殿は綿津見神の宮でありますから、其の御門の前にある井戸の傍の楓の木の上に御登りになつて御待ちなさい。そうすれば綿津見神の女が出で來て必ずいゝやうに取り議らひまするから』

と申し上げて船を流してやつた。

此の神は鹽椎神と申す神である。

火遠理命は鹽椎神に敎へられた如く、船を下り給ひて其の楓の木の上

に御登りになつてゐられると、綿津見神の御女豐玉姫の侍女は玉をちりばめたる器を持つて來て、水を汲まうとすると、井戸の中に人が笑つて居る影がさかさまに映つて居た。驚いて仰いで見ると、麗しい男の神が楓の木の上に御出でになつて居た。

火遠理命は其の侍女に、

『水を一杯呉れ』

と仰せられた。侍女は水を酌んで其の玉の器に入れて捧ると、命は水をば御飲みなさらず、御頸の珠を解いて御口に含み其の器に唾して入れて御返へしなされた。

侍女は珠を取らうとしたがどうしても離れなかつたので、其の珠をつけたまゝ豐玉姫に献つた。

豐玉姫は其の珠を御覽になつて、

『門の外に誰か人が居るのか』

と御問ひになつたので侍女は、

『井戸の傍の楓の木の上に麗しい人かゐます。妾はわが王の綿津見神のみ勝れて美しいと思ふてゐましたが、其の人はわが王にもまさつて貴い姿をしてゐます』

と水を乞うたことから、水を飲まずに此の珠を入れてよこしたことを答へ、

『此の珠を取らうとしたがどうしても取れないので、入れたまゝ持つて參つたのであります』

と御答へ申し上げた。

豐玉姫はこれを聞かれ、侍女と共に御門の外へ出て御覽なさると、果して一人の若く麗しい神がゐてあつた。

そこで豐玉姫は此の事を御父の綿津見神に申し上げると、綿津見神は御自身出で迎へ

『此の神は天津日高の御子、虛津日高と申す神である』

と云つて、命を内に請じ入れ海驢の皮の疊八枚、絹の疊八枚を重ねて敷き、其の上を命の御座として、數々の珍味を集めて御馳走申し上げ豐玉姫を御妃として奉つた。

綿津見神は命に打ち向はせられ、

『天神の御子の此處へ御出でになつたのは、如何なるわけでありまするか』

と問はれたので、火遠理命は、其の兄命の釣鉤を失つたことから、鹽椎神の敎へのまゝに此處へ來たことを御告げなされた。

綿津見神はこれを聞かれて、

『いや、それは御心配遊ばしますな。此の海がどんなに廣くとも、私の心のまゝに探し求めて、失くなつた鉤を獻じまするから』

と御答へ申し上げ、直に海中の魚類を悉く集め、

『もし天神の御子の鉤を取れるものがあるか』

と問ひ給ひしに、諸々の魚は皆知らぬ由を申し上げた。

其の中に一疋の魚が申すには、

『此の頃赤鯛は喉に刺があつて久しい間物を喰はずにゐましたから、きつと其の鉤を取つたのでせう』

と云つた。

そこで急いで赤鯛を呼び、其の喉を探つて見ると果して鉤があつた。

清い水に洗つて命に獻ると疑ふ方なき、火照命の鉤であつたから、命は始めて御安心なされ、其處に三年の月日を御暮しなされた。

火遠理命は、何不自由なく御暮しなされてゐられたが、折にふれて思ひ出すのは故郷のことであつた。そして其の初めのことを思ひ出されて、

『今、釣鉤も首尾よく得られたから、一先づ歸つて兄命に返へさなくてはならない』

と思し召され、いよ〳〵御還りなさることになつた。

綿津見神はおん名殘りを惜み給ひ、

『天神の御子のわが國へ御出でになつた欣びは何時までも忘れは致しませぬ。これから後も遠く海を距てゝ居るが、時々御出で下さるやう御願ひ申します』

と海の寶と持ち傳へた、潮滿珠、潮乾珠の二つを取り出して、其の用ゐ方法を御敎へ給ひ、

『また此の鉤を兄命に御渡しなさるゝ時、淤煩鉤、須々鉤、貧鉤、宇流鉤、と云つて後手に御渡しなさい。そして兄命は高田を作らばあなたは低田を御作りなさい。また、兄命は低田を作るならあなたは高田を御作りなさい。そうすれば私は水を掌つて居りますから三年の間に兄命は必ず貧しくなるでせう。もしあなたを恨んで攻め戰ふことがあつたら、此の潮滿珠を出して溺らしめ救けを乞うたらば、此の潮乾珠を出して御救ひなさい。そうすれば兄命は必ず、あなたに從うやうになりまするから』

と御敎へになり、海の中の鰐を悉く集めて、

『天津日高の御子虛空津日高、今御國へ御還へりになるのであるが、誰々は幾日に御送り申すことが出來るか』

と問ふと、多くの鰐共は各々其の身の長さのまゝに、日限をはかつて答

へた。

其の中に一尋鰐は

『わたくしは能く一日の中に御送り申しまする』

と申したので、火遠理命は此の鰐に乘つて八重の潮路を御還へりになられた。

其の鰐は先きに云つた通り、果して一日で送り申したので、命は小さい刀を其の鰐の頸につけて返へされた。それ故に其の鰐をば今に佐比持神と云つて居る。

十八　豐玉姫命

火遠理命は綿津見神に教へられた通りにして、彼の釣鉤を兄命に御返し遊されたので、兄命はそれからだん〳〵貧しくなつたので、いよ〳〵

荒い心を出し、兵を起して火遠理命を攻めやうとしたので、命はかの潮滿珠を出して溺らせ、兄命は救けを乞ふと、潮乾珠を出して御救ひなされ、かやうにしてたしなめたので、さすがの兄命も

『私は今から後おん身の晝夜の守護人となつて仕へやう』

と申して、是れより永く其の溺れた時の狀をして、火遠理命の御心を慰めて仕へ奉つた。

かくて火遠理命は御弟なるも三種の神器を承けて豐葦原の中國を治めなされた。

こゝに綿津見神の御女なる豐玉姫は、三年の間火遠理命の御傍に仕へ奉つたが、いよ〳〵御還りなさるゝ時、

『妾はもう姙娠になりました。けれども天神の御子を海の中にて產むはあまりに畏れ多いことであります。それで產む時になればあ

なた様の御國へ參りますから、風が吹いて波の荒い日に濱邊に產屋を建てゝ御待ち下さい。

と申して御別れしたので、命は御還りなされてから、鵜の羽を茅草として產屋を御造りになられたが、まだ屋根を葺かない中に豐玉姬命は、大きな龜に乘つて海を照らし、風波を凌いで御出でになり、御腹が堪へがたくなつたので、屋根の葺き終へるのを待ちかねて產屋に御這入になつた。

そして御子を產まうとする時に、火遠理命に御告げになるやう、

『すべて他國の人は子を產む時になれば、元の國の姿になるものでありまするから、何卒ぞ妾を御覽なさらずに下されませ』

と吳々も申上げた。

命は其の御言葉を怪しいと思召され、まさに產みまつる時に、ひそかに

戸の隙間から覗いて見給ふと、豐玉姬は大きな鰐になつて腹這つてゐられた。

此の樣を見給ひて命はお驚きになつて其處を逃げ出されたが、豐玉姬は命の覗き給ひしこと知つて、非常に恥かしく思し召し、其の御子を生み置いて、

『妾はこれより後も海を渡つて通はうと思つてゐたのでありますが、あなたは妾の姿を覗かれたので、もう永久に逢うことは出來ませぬ。』

と仰せられて、海と陸との通ひ路を塞いで御還へりになられた。

これから後は、海と陸との往來は全く絕えてしまつた。

けれども豐玉姬は後に、其の覗き給ひしことを恨みながらも、火遠理命を戀ひ慕つて、其の御子を養ひ育てる爲めに、御妹の玉依姬を御遣はしになつた時、火遠理命に御歌を御送りなされた。

赤珠は緒さへ光れど白珠の
君がよそひし尊くありける

此の歌は

『赤珠はそれを通して居る緒までが光つて見ゆるが、白玉のやうに美しいわが夫の御姿は、それよりも尚貴くゆかしい』

と云ふ、命を戀ひ慕ふた御歌である。

火遠理命は、此の御歌を御覽なされ、ありし昔のことがそゞろに思ひ出されて、

沖つ鳥鴨どくしまにわが寐ねし
妹はわすれじ世のことゝに

と、これも御歌をもつて御答へなされた。

此の歌は、

『遠い海の中の鴨のつく嶋で、一所に居た私の愛しい妻のことは、一生忘れることはあるまい』

と云ふ豐玉姫のことを御慕ひ遊ばした御歌である。

又其の御子は、まだ產屋の屋根が葺き上らない時に御生れになつたので御名を天津日高日子波限建鵜葺草不合命と申し上げる。御母の豐玉姫は御還へりになられたので火遠理命は此の御子を育て奉るために他の婦女の乳を御用ゐになり、乳母湯、母飯、嚼湯坐を定めて御育てになつた。これは我が國で乳母の出來た始まりである。

また豐玉姫は實際は鰐になつたのではなく、御產の時非常に御苦しみになられたのを、形容して傳へたのであるとも云ふことである。

かくて火遠理命、即ち彦火々出見命は御年五百八十歳まで高千穗の宮に御出でになり、其處にて御崩れになつたので、大隅國姶良郡に御陵を

定めて御祀りになつた。

十九　東國遷都

天津日高日子波限建鵜葺草葺不合命は御父日子火々出見命の御跡を繼いで豊葦原の中國の王となり、給ひ御姨なる玉依姫を御妃として五瀬命、次に稲氷命、次に御毛沼命、次に若御毛沼命の四柱の御子を御生みになられた。

鵜葺草葺不合命は其の後久しく世を治め、給ひて西洲の宮に御崩れになつた、御陵は大隅國肝屬郡姶羅の郷にあるのがそれである。

また第四の御子なる、若御毛沼命は、神ながら英武に坐して御父命の崩御の後、兄命等と共に皇居を東の國に御遷しなさらうとして軍を從へて諸國の荒ぶる神等を平げ、大和國の畝傍の橿原に都を御定めになつ

たので、神倭伊波禮彦命とも申し上げる。すなはち第一代の天皇に坐します神武天皇である。

神武天皇の兄命の五瀬命は軍の半ばに御崩れになり、御毛沼命は朝鮮の國の王となられ、稲氷命は、御妣玉依姫の國なる海原に御出になられた。

日本神代物語（完）

附錄

一　國引き

須佐之男命の御子八島士奴美命の御曾孫に、八束水臣津野命と申す神があつた。御先祖の須佐之男命が出雲の國へ御出でになられてから、代々出雲の國に御住居なされて、豐葦原の中國の王として、世を治めてをられた。

ある時、臣津野命は出雲の國を御巡廻なされて、

『この出雲の國は、狹い布のやうに、始めから狹く作つてしまつた國である。私は此の國を大きく作り堅めなければならぬ』

と仰せられて遙かに新羅國の岬を御覽なされると、國の餘りがあつた

ので、

『私はあの岬を引いて此の國を作り堅めやう』

と、少女の胸のやうに廣い鋤を持つて宛も大きな魚でも割くやうに其の岬を切り取り、三繕の太い綱をそれに掛けて、靜かな波の上を河船をゆら〳〵と引き寄せるやうに、

『國よ來い、國よ來い』

と引き寄せて御作りになつた處は、岐豆岐の御崎である。また其の綱を繫いだ杙は、石見の國と、出雲の國との境にある、佐比賣山で、引き寄せた綱は蘭の長濱である。

次に北門佐岐の國を、

『國の餘りがあるだらうか』

と御覽なさると、これも國の餘りがあつたので、

『私は國引きをしやう』

と仰せられて、其の國を切り取り三繕の太い綱を打ち掛けて、

『國よ來い、國よ來い』

と、ゆら〳〵と引き寄せて御作りになつた處は、狹田の國である。

次に北門隱岐の國を、

『彼の國にも餘りがあるだらうか』

と御覽なされると、此の國にも餘りがあつたので、

『私は彼の國を引き寄せて此の國を作らう』

と、其の餘れる處を鋤をもつて切り取り、太き三繕の綱を打ち掛けて、

『國よ來い、國よ來い』

と、ゆら〳〵と引き寄せて御作りになつた國は、闇見の國である。

次に高志の國都々の三崎を御覽なされて、

『うむ、彼の國にも餘りがある。私は國引きをしやう』
と仰せられて、その餘りを切り取り、
『國よ來い、國よ來い』
と、ゆら〳〵と波の上を引き寄せて御作りになつた處は、三穗の崎である。其の引き寄せた綱は夜見の島となり、綱を繫いだ杙は伯耆の國の大神岳である。
臣津野命は、
『これで國引きが終へた』
と仰せられて、ある森に御杖を突き立て、
『意惠』
と仰せられたので後に其の處を、意宇と云ふやうになつた。

二　天之日矛命

八束水臣津野命の御孫の大國主命は、御先祖の遺志を繼承して、やはり出雲の國に御出でになり、豐葦原の中國の王として頻りに產を殖やし業を興して人民の爲めに御心を注がれた。
大國主命は常に杖としてつき給へる矛を持ち、諸國を巡り給ひて、播磨の國へ御出でになつた時新羅の國から渡つて來た天之日矛命と云ふ神が宇頭川の底へ行つて、大國主命に
『私は新羅の國から來た、天之日矛と申す神でありまするが、何卒此の國に宿を貸して下さりませぬか』
と御願ひ申したが、大國主命はなか〳〵御承諾なさらなかつた。
そこで天之日矛命は恨んで、

『大神は此の國の主でゐらせられるから、宿を御願ひするのであります。それに何故に貸して下さらぬのか』

と仰せられたので、

『それでは海の中を許すであらう』

と海の中を御貸しなされた。

天之日矛命は致し方なく、佩き給へる劔をもつて海の水を搔き廻らし、忽ちの間に立派な家を建てゝ其處に宿を取られた。

大國主命は此の狀を御覽なされて、

『此の神はなか〳〵猛しい神である。その備へをせねばならぬ』

と仰せられて播摩の國を堅く御守りなされた。

此の天之日矛命は、新羅の國の王となつてゐられた神であるが、わが豐葦原の中國へ何故來たかと云ふと、新羅の國に阿具沼と云ふ沼があつ

た此の沼のほとりに農家の少女が晝寢をして居つた時に、日の光が虹のやうに其の少女を輝した。

此の有樣を見てゐた、一人の百姓は其の後常に此の少女の狀に氣を付けてゐたが、少女は其の晝寢をした時からとう〳〵姙娠になつて、生んだのは一つの赤い玉であつた。百姓の男は其の玉を貰ひ大切にして腰につけてゐた。

ある時、此の百姓は谷間の田に働いてゐる傭人共の食物を牛に負はせて行くと、新羅の國の其の頃まだ王子であつた天之日矛命に逢つた。

天之日矛命の御供の者は忽ち此の百姓を捕へてしまつた。

『何故に汝は食物を手に負はせん谷に行かうとするのだ。汝は必ず此の牛を殺して食ふのだらう』

と云つて殺さうとした。

百姓は驚いて

『いや私は決して此の牛を殺して食ふのではありませぬ。今私の田に働いてゐる傭人の食物を送つて行くのであります』

と辯解したが、なか〳〵許さなかつたそこで其の百姓は、

『此の玉を捧げまするから、何卒御ゆるし下されませ』

と、腰に着けてゐた彼の赤い玉を取り出して、日矛命に捧げて、やう〳〵許してもらつた。

天之日矛命は、其の玉を持つて來て床の間に置くと忽ちの間に麗しい少女になつてしまつた。

此の少女は日矛命の妃になり、何時でもいろ〳〵な珍しい物を調理して、日矛命に進むるが、日矛命は心がだん〳〵奢つてそれに滿足せず、絶えず口汚く叱り罵るので、少女は恨んで

『妾はもとよりあなたの妻になるやうな者ではないのです。それだから今此の國を去つて妾の先祖の國へ行きます』

と云つて、日矛命が外に出て居ない留守にこつそり船に乘つて逃げ出し、筑紫の國へ渡り岐伊の比賣島に住んでゐたが、

『此の島は新羅の國からさほど遠くはない。日矛命は必ず尋ねて來るであらう』

と云つて、其の島から更に攝津の國へ遷つて留つてゐられた。

今、肥前の國と攝津の國とに、比賣許曾の社のあるのは、筑紫の國と云つてゐた肥前の國から、攝津の國へ遷られたからである。

さて天之日矛命は宮殿に還へつて見ると、妃がゐない。

『さてはとう〳〵逃げたのだな』

と思し召され、其の跡を追つて攝津の國へ船を御着けになり、陸に上ら

うとしたが、其處の神は道を塞いでしまつて、如何しても陸に上げない。致し方なく更に還つて但馬の國へ行つて暫らく御住居なされた。そして其の國の俣尾と云ふ神の前津見と云ふ娘を妃として、御子多遲摩毋呂須久を御生なされ、永くわが國に歸化して住まはれた。

後、仲哀天皇の皇后になられた、神功皇后は、此の天之日矛命の御子孫である。

三　三種の神器

三種の神器とは、八咫の鏡叢雲の劔、八尺瓊の曲玉の三種を云ふのである。

天照大御神は御弟の須佐之男命の亂暴なお振舞を見畏みなされ天之岩屋へおん身をお隱しなされた。

光華明彩ことが世界を隈なく輝す程、御德の高い神樣でゐらせられたのだから、其のおん身を隱しなされてから、高天原は云ふも更なり、葦原の中國まで一時に暗くなつてしまひ、到る處に惡い神が起つて、世の中は亂れに亂れた。

そこで高天原にては、八百萬の神々は大層御心配なされて天之安河原に御集りになり、如何して天照大御神を岩屋から出し參らせたら宜からうか、と御相談なされた。

此の時高皇產靈神の御子に思兼神と云ふ神樣があつた。智謀勝れてゐられたので八百萬の神々は此の神に御一任なされた。

思兼神は遠く謀り深く思うて

『先つ天照大御神の御心を和め奉らなければならぬ。それには大御神の御姿の寫るやうな鏡をこしらへやう』

と仰せられたので、他の神々等は天之香山の鐵を取つて、天津麻羅と云ふ鍛冶を召され石凝姥命に命じて鏡を作らせたが、最初の鏡は八百萬の神々の御氣に召さなかつたので、再び石凝姥命に命じて一層麗しい鏡を作らせた。これが今伊勢神宮の內宮に齋ひ祀つてある三種の神器のうちの神鏡である。又最初の鏡は紀伊の國の日前國懸の神宮に御祀りしてある。

又、玉祖命に命じて曲玉を作らせた。この曲玉は三種の神器の中の八尺瓊の曲玉である。

それから天之兒屋根命は天之香山の雄鹿の肩骨を丸拔きにして天之香山のかば櫻を取つて占ひ、天之香山の眞榊を根堀りにして、上の枝には曲玉を著け、中の枝には八咫の鏡を懸け、下枝には青白二色の布帛を垂れて太玉命はこれを持ち捧げ、天之兒屋根命は麗しい言葉を綴つて

祝詞を申し上げ、天之手力男命は岩屋の戸の側に隱れ立ち、天之宇受賣命は天之香山の日蔭葛を襷にかけ、眞辟葛を鬘として天之香山の笹葉を手に持ち、岩屋の前に桶を伏せて其の上に乘つて踏み轟かし、巧みに滑稽けたる樣をして、乳を顯はし緒を長く垂れて躍り舞うたので、八百萬の神々は餘りのをかしさに聲を立てゝお笑ひになつた。

天照大御神は岩屋の中で此の笑ひ聲を御聞きなされ、石屋の戸を細目に開けて

『私が岩屋に隱れたから高天原も葦原の中國もことごとく暗くなつたらうと思ふに、何故天之宇受賣は斯く舞ひ遊び、八百萬の神々は笑ふのか』

と御聞きなされた。

天之宇受賣命は此の時、

『大御神に勝つて貴い神様が御出でなされたから、斯うして喜び遊ぶのであります』

と御答申し上げた。

斯く申し上げて居の中に、太玉命は其の鏡を差し出して大御神の御覽に入れたので、いよ〳〵怪しいと思し召され、少しく戸から御身を御出しなされたので、側に隱れてゐる天之手力男命は御手を取つて出し參らせ、太玉命は七五三縄を取り出し其の後方に控き渡して、

『此の内へは再び御還り遊ばしますな』

と申し上げ大御神をば豫ねて造つて置いた新しい宮殿にお遷しなされて、仕へ奉つた。天照大御神は岩屋を御出でなされたので、高天原も葦原の中國も悉く明るくなつたので、八百萬の神々は非常に御喜びなされた。そして御協議になつて須佐之男命を高天原から追ひ下して

しまつた。

そこで須佐之男命は致し方なく先づ朝鮮に御渡りになり御治めになつてゐられたが、船で出雲の國へ御着きになり、簸の河上で櫛稲田姫命を助けて、八俣の大蛇を退治し給うた時、大蛇の尾の中から現れた劔は非常な名劔であつたので、高天原の天照大御神に献じた。是れが即ち三種の神器の内の天之叢雲劔である。

須佐之男命は出雲の國にあつて、豐葦原の中國即ち日本の國と、遠く海外の國々迄御治になつて居られたが、六代の御子孫の大國主命の御時に天照大御神は御子の天之忍穗耳命をして此の葦原の中國を御治めなさせられやうとして、度々御使を遣はされ、最後に健御雷命、經津主命に天之鳥船神を添へて御遣はしになり、葦原の中國を悉く平定させ、更に御孫の邇々藝命を御降しなされた時に、彼の岩屋に御隱なされた時

御用ゐになつた、八咫の鏡と八尺瓊の曲玉、それに須佐之男命の献上された、叢雲之劔の三種の御神寶を御渡しになり、わけても八咫の鏡をば『此の鏡は宛もわれを見るごとく、殿を同じくし、床を共にして齋き奉れ』

と御敎へになつて、五部族の長の神々を始め、多くの神々を從はしめて天之浮橋から高千穗の峰に天降し遊された。

これ迄高天原の天照大御神の御傍にあつた三種の神器は、この時から神武天皇の御時まで高千穗の宮の奥深く御祀りしてあつた。

第一代の神武天皇は、神ながら英武に坐して、此の豊葦原を治むるには、高千穗の宮殿に御出でになつては、御不便であると思し召され、御兄君達と御相談になつて、三種の神器を奉じて處々の惡い賊徒を御征伐なされ、大和の國の橿原の地に皇居を定めて玆に第一代の天皇となられ

た。そして鳥見の山中に立派な齋場を造つて高天原の神々を御祀りになり、親しく戰勝の御禮を申し上げた。

それから凡そ六百年ばかり後の、第十代の崇神天皇の御時に疫病が流行して到る處に多くの人が死んだ。そして百姓などは職を失つて諸國に流浪するやうな有樣であつた。

それで崇神天皇は非常に御心配なされ、皇女豊鍬入姫に命ぜられて彼の三種の神器の中の八咫の鏡と叢雲の劔とを、大和の笠縫邑に移し參らせ、其處に壯嚴なる神殿をこしらへて、皇女をして朝夕御祀りをさせた。そして別に鏡と劔とを模造して、彼の神代より傳つた八尺瓊の曲玉の三種をば神器として、宮中に御祀りして、天皇のおん身の守護となされた。

第十一代の崇仁天皇の御時、皇女の倭姫命は此の天照大御神の御魂と

して齋き祀つてある、鏡と劔とを何處に御祀り申したら宜からうかと神器を守護して、近江國から美濃國を巡つて伊勢の國へ御出でになられた時、天照大御神は倭姫命の御夢に現れ給ひて、

『此の神風の伊勢の國は非常にいゝ國である。われは此の國に居りたいと思ふ』

と御告げがあつたので、倭姫命は畏みて五十鈴川の川上に立派な神殿をお作りになり、其處に鏡と劔とを御祀りしてお仕へなされた。此の宮を磯の宮と云ひ、後に伊勢の内宮と申し上げるのである。又倭姫命は大御神の御杖となつて永く御仕へなされた。伊勢の齋宮と云ふことは此の時から始つたのである。

後又、天照大御神の御神勅によつて、第二十代雄略天皇の時、穀物の神なる豐受比賣命を丹波から御移しなされ、伊勢の國へ御祀り申し上げた。

この宮は即ち外宮であつて、内宮外宮を併せて今は伊勢の皇大神宮と申すのである。

次の景行天皇の御時、東國の蝦夷が悉く叛ひて民を亂したので、天皇は皇子日本武尊に命じてこれを征伐せしめた。

日本武尊はもとの御名を、小碓尊と申し上げ御年わづかに十六歳の時、九州の熊襲を御征伐なされ、首尾よく梟帥をお討ち取りになつたが、梟帥は其の死際に尊の御武勇を感嘆して、日本武尊と云ふ御名を奉つたのである。

されば此の度の東國の蝦夷を征伐なさるについても、わづかの臣下を從へさせられ、先づ伊勢神宮に御參拜遊して御武運の長久を祈り奉つた。

其の時御姨の倭姫命は、親しく伊勢神宮にお仕へになつてゐられたの

で、かの天之叢雲の劔を尊に賜はり、また錦の小さい袋を御渡しになつて、

『もしおん身に危いことがあつたら此の袋を開いて見なさい』

と御敎へになつた。

尊はこの二品を有り難く御受けして、それから尾張の國に御出でなり、國造の家に御泊りになつたが其處に宮簀姫と呼ぶ非常に美しい少女があつたが、尊は先づ蝦夷を平げてから御妃になさらうと思し召され、駿河の國へ御出でになつた。

すると此の國の國造は心の善からぬ者であつたから、尊を欺いて、

『この野の中の大きな沼に甚だ惡い神が住んで居りますから、何卒御退治して下さりませ』

と御願ひ申し上げた。

武勇勝れてゐられた尊は、早速御承諾あそばされ其の沼に案内させたが、野原に入ると丈なす草が一面に生ひ茂つて、あたりが見えない程であつた。

尊は猶ほもお進みなさると、赤い炎が天を焦すばかりに、四方から火が燃えて來て、危いこと此の上もない。これは國造等は尋常一樣の手段では、とても尊に及ばないと知つたので、尊を欺いて燒き殺さうとしたのである。

尊は

『えゝさては欺かれたか』

と御怒りになつたが炎々たる猛火は、早くも尊の御身に及ぼうとして危險此の上もない。此の時ふと御心に浮んだのは、姥君の倭姫姫から賜はつた彼の小袋であつた。急いで袋の口を開いて御覽になると、中

には火打石があつた。

尊は大いに喜んで、腰なる天之叢雲の劔を拔き放ち、四邊の草を薙ぎ拂ひ、かの火打石を以つて向火をつけたので、不思議や急に風向きが變つて、火は見る見る中に賊等の方に向つて燃え始めたので、賊等は忽ちの中に燒かれて死んでしまつた。

これより此の叢雲の劔をば草薙の劔と申し上げるやうになり、また尊の危難を免れなされた處は、今に尾張の國に燒津と呼ばれて殘つてゐる。

日本武尊はそれより、駿河の國の土賊共を平定し給ひ、海路を上總の國へ御進みなされ、安房の國へ御上陸遊されて、順次に蝦夷を御征伐なされ、また尾張の國へ御還へりになり、かの宮簀姫の許に御泊りになつて、姫をば御妃となされた。

其處に久しく御留りになつて居る中に、近江の國の伊吹山に惡い神があると聞いて、かの草薙の劔をば宮簀姫のもとに置いて御征伐に御登りになつたが、惡い神の毒氣を受けて、さしも武勇の尊もとう〳〵お崩れになつてしまつた。

後に殘つた宮簀姫は、かの草薙の劔を尾張の國の熱田に御祀りになつて、宛も尊に仕へ奉るが如く朝夕御祀りなされた。これが今の熱田神宮である。

さて崇神天皇の御時に、神器と同じ御殿に御住居なされては、神威を汚すことがないとも限られぬと云ふので、鏡と劔とを模造し給ひこれに曲玉を加へて、天皇の御守りとなされたが、代々の天皇は鏡は殊に賢所に御祀りになり、劔と曲玉とは清涼殿の内の、夜の御殿の内の御枕元の二階棚の上に安置して、天皇が何處へ行幸遊されても、此の神劔と曲玉

とを奉持遊さるゝのである。

後、源氏と平氏とが戰爭を始めて、平氏は追々敗戰しとう〳〵屋嶋にも破れたので平宗盛は、安德天皇と神器とを奉じて長門の壇の浦へ落ち延びたが、源義經のために散々に敗北し、二位の尼は安德天皇を抱き奉り海に入つてしまはれた。此の時神器と曲玉も海に沈んだのである。源氏方の軍兵は平氏の敗軍と見るや、われ先きにと天皇の御座船に亂入したが、其處に神鏡が唐櫃の中に安置されてあるのを見出し義經から後白河法王に献上した。

また安德天皇と共に海底深く沈んだ、神劔と曲玉とは、曲玉の方は間もなく箱のまゝ水面に浮び出たのでこれを拾ひ奉つたが、神劔はいくら探し奉つても見出すことが出來なかつた。崇神天皇の御時模造し給うた神劔は、かくして千尋の海底に永久に沈んでしまつたのである。

それで後鳥羽、土御門の御二代二十四年の間は、清凉殿に置かせられた御劔をもつて御代用なされたが、順德天皇の御即位の時に、伊勢神宮の御神告によつて、神宮から献上した御劔を神劔と定めて、今日なほ御祀りしてあるのである。

それ以來戰爭などのために、神器は時々御動座あつたが、神器御自身には何等の異變もなく代々の天皇が御璽としまた御守りとして、今上天皇の御代まで連綿として御傳へになつたのである。

天照大御神は御孫の邇々藝命を、葦原の中國即ち日本の國へ御降しなさらうとする時、

『此の鏡は專らわれを見るごとく齋き奉れ。寶祚の盛へまさんこと天地と共に窮りなかるべし』

と御敎へになつた如く、代々の天皇は神鏡を祀つてある伊勢神宮を、殊

の外御崇敬遊され、また賢所の神鏡は伊勢神宮の御名代として、皇室に何事があつても御奉告遊され、文武の臣が海外へ出張を命ぜられた場合には、特に賢所へ參拜を許されて、遙かに皇室の御先祖たる天照大御神へ御暇乞ひをなさしめ、其の御加護を仰がさしむるのである。

かくて我が日本帝國は、高天原の神々等の御加護と、此の三種の神器の威靈とによつて、御神勅の如く、一系の皇統連綿として續かせられ、皇室は天地と共に榮へ、國運は隆々として旭日の昇天する如く盛へるのである。

四　全國官國幣社

北海道

札幌區圓山村鎮座、官幣大社、札幌神社、祭神、大國魂神、大巳貴神、少彦名神の三座、

函館區谷地町鎮座、國幣中社、函館八幡宮、祭神、品陀和氣尊一座、

▲東京府

東京市麹町區永田町鎮座、官幣大社、日枝神社、祭神、大山咋神一座、

北多摩郡府中町鎮座、官幣小社、大國魂神社、祭神、武藏大國魂神一座、

東京市麹町區富士見町鎮座、別格官幣靖國神社、祭神、明治維新前後之殉難者並其の以後の陸海軍殉國將士、

▲京都府

愛宕郡上賀茂村鎮座、官幣大社、賀茂別雷神社、祭神、別雷神一座、

同下鴨村鎮座、官幣大社、賀茂御祖神社、祭神、賀茂建見命、玉

依姫命の二座、
綴喜郡八幡町鎮座、官幣大社、男山八幡宮、祭神、品陀別尊、息長帶姫尊、比賣神三座、
葛野郡松尾村鎮座、官幣大社、松尾神社、祭神、大山咋命、中津島姫命の二座、
同衣笠村鎮座、官幣大社、平野神社、祭神、今木神、久度神、古開神、比昧神の四座、
紀伊郡深草村鎮座、官幣大社、稲荷神社、祭神、倉穗魂命、大宮賣命、佐田彦命の三座、
京都市上京區岡崎町鎮座、官幣大社、平安神宮、祭神、桓武天皇一座、
同下京區祇園町鎮座、官幣大社、八坂神社、祭神、須佐之男命、奇稲田姫命、八柱御子の三座、

同上京區飛鳥井町鎮座、官幣中社、白峰宮、祭神、崇德天皇、淳仁天皇の二座、
葛野郡梅津村鎮座、官幣中社、梅宮神社、祭神、酒解神、大若子神、小若子神、酒解子神の四座、
愛宕郡鞍馬村鎮座、官幣中社、貴船神社、祭神、闇靈神一座、
乙訓大原野村鎮座、官幣中社、大原野神社、祭神、建御雷神、齋主神、天之兒屋根神、比賣神の四座、
京都市上京區吉田町鎮座、官幣中社、吉田神社、祭神、建雷御命、齋主神、天之兒屋根神、比賣神の四座、
同上京區馬喰町鎮座、官幣中社、北野神社、祭神、菅原道眞朝臣一座、
同上京區櫻鶴岡町鎮座、別格官幣社、護王神社、祭神、和氣清麿卿

和氣廣蟲の二座、
愛宕郡大宮村鎮座、別格官幣社、建勳神社、祭神、平信長朝臣一座、
京都市下京區茶屋町鎮座、別格官幣社、豐國神社、祭神、豐臣秀吉
朝臣一座、
同上京區染殿町鎮座、別格官幣社、梨木神社、祭神、藤原實萬朝臣
三條實義朝臣の二座、
與謝郡府中村鎮座、國幣中社、籠神社、祭神、天水分神一座、
南桑田郡千歳村鎮座、國幣中社、出雲神社、祭神、大國主命、三穗
津姫命の二座、

▲大　阪　府

中河內郡枚岡村鎮座、官幣大社、枚岡神社、祭神、天兒屋根命、比
賣神、齋主命、武御雷神の四座、

泉北郡鳳村大鳥鎮座、官幣大社、大鳥神社、祭神、大鳥連祖神一座、
東成郡住吉村住吉鎮座、官幣大社、住吉神社、祭神、底筒男命、中
筒男命、上筒男命、息長帶姫命の四座、
大阪市東區生玉町鎮座、官幣大社、生國魂神社、祭神、生島神、足
島神の二座、
三島郡島本村廣瀨鎮座、官幣中社、水無瀨宮、祭神、後鳥羽天皇、
土御門天皇、順德天皇の三座、
東成郡住村鎮座、別格官幣社阿部野神社、祭神、北畠顯家公、北畠
親房公の二座、
北河內郡甲可村鎮座、別格官幣社、四條畷神社、祭神、楠正行朝臣
一座、

▲神　奈　川　縣

鎌倉郡鎌倉町鎮座、官幣中社、鎌倉宮、祭神、護良親王一座、
高座郡寒川村鎮座、國幣中社、寒川神社、祭神、寒川比古命、寒川
比賣命の二座、
鎌倉町鎮座、國幣中社、鶴岡八幡宮、祭神、應神天皇一座、

▲兵　庫　縣

武庫郡大社村鎮座、官幣大社、廣田神社、祭神、撞賢木嚴之御魂天
疎向津姫命一座、
津名郡多賀村鎮座、官幣大社、伊弉諾神社、祭神、伊弉諾神一座、
神戸市下山手通鎮座、官幣中社、生田神社、祭神、稚日女尊一座、
同長田村鎮座、官幣大社、長田神社、祭神、事代主神一座、
明石郡垂水村鎮座、官幣中社、海津社、祭神、底津海津見神、中津
海津見神、上津海津見神の三座、

神戸市多聞通鎮座、別格官幣社、湊川神社、祭神、楠正成朝臣一座、
出石郡神美村鎮座、國幣中社、出石神社、祭神、八種之神寶、
夬粟郡神戸村鎮座、國幣中社、伊和神社、祭神、大巳貴命一座、

▲長　崎　縣

壹岐郡那賀村鎮座、國幣中社、住吉神社、祭神、底筒男命、中筒男
命、表筒男命の三座、
上縣郡峰村鎮座、國幣中社、海神社、祭神、豐國姫命一座
長崎市西山鄉鎮座、國幣中社、諏訪神社、祭神、建御名方神、八坂
刀賣神の二座、

▲新　潟　縣

西蒲原郡彌彥村鎮座、國幣中社、彌彥神社、祭神、天之香山命一座、
佐渡郡羽茂村鎮座、國幣小社、度津神社、祭神、五十猛命一座、